

北海道立埋蔵文化財センター

# 年報 9

平成19(2007)年度

北海道立埋蔵文化財センター

# 年報 9

平成19(2007)年度



船形土製品（縄文・続縄文）



船形土製品（オホーツク文化期）



展開写真撮影の方法（小川忠博氏撮影）



ライティングによって変化する千歳市ママチ遺跡の土製仮面（小川忠博氏撮影）

# 目 次

## 目次

1	設置の目的	1
2	沿 革	1
3	施設の概要	1
4	調査研究事業の概要	3
	(1) 重要遺跡確認調査	3
	(2) 大会・研究会・研修会参加	5
	(3) 市町村等協力	5
5	収蔵・保管事業の概要	6
	(1) 収蔵資料目録	6
6	普及・啓発事業の概要	8
	(1) 展示活動	8
	(2) 特別利用等の状況	16
	a 特別利用一覧	
	b 模写品等使用承認一覧	
	c 資料貸出承認一覧	
	(3) 講演会・報告会	20
	(4) 考古学教室	21
	(5) 考古学教室出前講座	23
	(6) こども考古学教室	24
	a 「夏休み親子考古学教室」	
	b 写生会「ビビちゃんと描く縄文の世界」	
	c 「冬休み縄文生活体験ひろば」	
	d 「冬休み親子考古学教室」	
	e 冬休み親子写真撮影会「フクロウ博士のフォトコンテスト」	
	(7) 研修	26
7	利用者状況など	27
	(1) 入館者一覧	27
	(2) 団体利用者対応	29
	(3) 購入図書一覧	31
	(4) 刊行物受領先一覧	33
8	講演会要旨	35
	(1) 秋季講演会 『船の考古学』（宇野隆夫氏）	35
	(2) 冬季講演会 『土の中から出てきたよ』（小川忠博氏）	47
9	特別展示概要	53
	(1) 『交流の考古学3－船－』	53

# 1 設置の目的

北海道には貴重な埋蔵文化財が数多く発見されており、これらの埋蔵文化財の保護、保存・活用を図るため、調査研究を行なうとともに、出土文化財等の収蔵保管、公開展示並びに文化財保護思想の普及啓発を図る総合的な機能を有する道立の埋蔵文化財センターを設置する。

# 2 沿革

- 平成7年3月 北海道立埋蔵文化財センター（仮称）基本構想策定
- 平成8年9月 本館基本設計完了
- 平成9年3月 本館実施設計完了
  - 10月 本館建設工事着工
  - 12月 別館（整理作業所）基本設計完了
- 平成10年3月 別館（整理作業所）実施設計完了
  - 9月 別館（整理作業所）建設工事着工
- 平成11年3月 本館建設工事竣工
  - 4月 北海道立埋蔵文化財センター開設
  - 8月 別館（整理作業所）建設工事竣工
  - 11月 一般公開

# 3 施設の概要

## (1) 工期

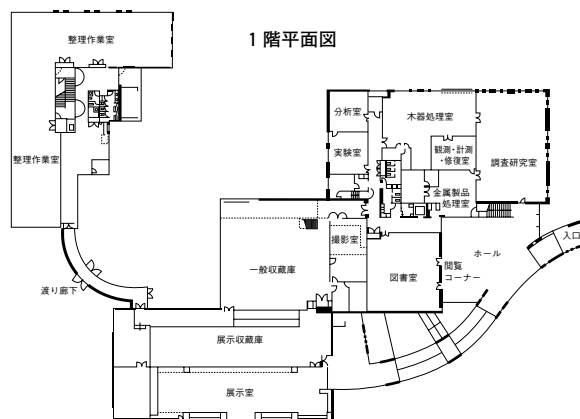
- [本館工事] 平成9年10月31日着工 平成11年3月18日竣工
- [別館工事] 平成10年9月10日着工 平成11年8月18日竣工
- [外構工事] 平成11年7月28日着工 平成11年12月10日竣工

## (2) 面積

- [敷地面積] 18,599.50㎡
- [延床面積] 本館：3,500.95㎡（鉄筋コンクリート造・2階建）  
別館：2,031.43㎡（鉄骨造・3階建；整理作業所）

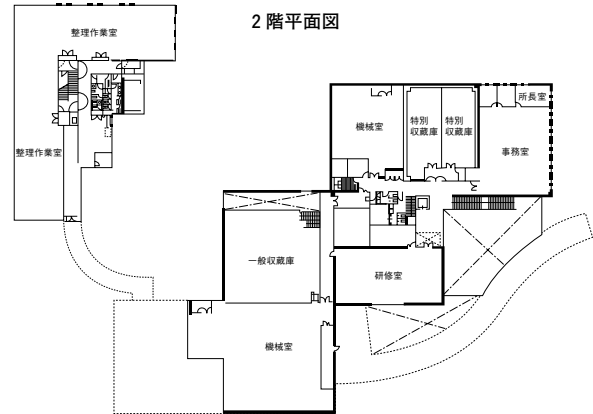
### [部屋別面積]

- 本館1階：調査研究室（253㎡）
- 保存科学室（167㎡）
- 観測・計測・修復室（47㎡）
- 金属製品処理室（31㎡）
- 分析室（48㎡）
- 実験室（53㎡）
- 撮影室・暗室（105㎡）
- 図書室（177㎡）
- 一般収蔵庫（399㎡）
- 展示収蔵庫（321㎡）
- 展示室（310㎡）

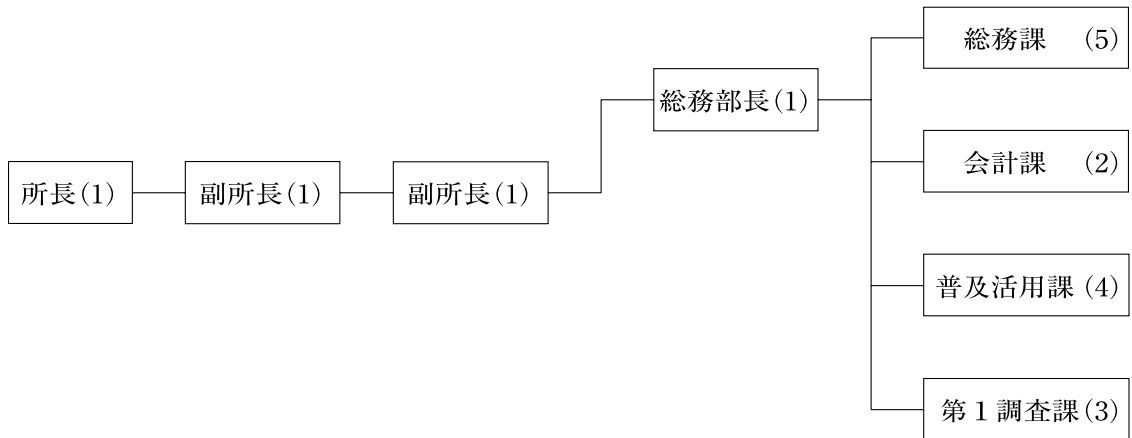


- 2階：所長室 (47㎡)
- 事務室 (241㎡)
- 特別収蔵庫 (227㎡)
- 研修室 (196㎡)
- 一般収蔵庫 (319㎡)

- 別館 1階：整理作業室 (520㎡)
- 2階：整理作業室 (540㎡)
- 3階：整理作業室 (220㎡)



(3) 組織図



(4) 職員名簿

職名	氏名	職名	氏名	職名	氏名
所長	森重楯一	総務部長	松本昭一	普及活用課長	村田大
副所長	佐藤俊和	総務課長	松本繁	普及活用課主査	藤本昌子
副所長	畑宏明	総務課主査	葛西宏昭	普及活用課主査	倉橋直孝
		総務課主任	中村貴志	普及活用課主任	藤井浩
		総務課参与	北浦満	第1調査課長	田口尚
		総務課参与	加藤英樹	第1調査課主査	花岡正光
		会計課長	吉田貴和子	第1調査課主査	立川トマス
		会計課主任	今本宏信		



## 4 調査研究事業の概要

### (1) 重要遺跡確認調査

〔調査遺跡〕 幌延町音類竪穴群遺跡（北海道教育委員会登録番号 G-09-1）

〔所在地〕 天塩郡幌延町字浜里188ほか 国有林174～175林班

〔調査期間〕 平成19年10月1日～10月19日

〔調査内容〕 北海道教育委員会では、北海道史をたどる上で重要と考えられる50遺跡を選定し、調査対象順に5遺跡ずつ10グループに区分している。北海道立埋蔵文化財センターでは、これらの遺跡を対象にして、重要遺跡確認調査を実施することとなった。確認調査は、平成12年度に小樽市・余市町所在の西崎山ストーンサークル、平成13・14年度に奥尻町青苗砂丘遺跡、平成15・16年度に恵山町（現函館市）恵山貝塚で実施した。幌延町音類竪穴群については、平成11年度以降に地元調整と予備的調査を行い、土地所有者および幌延町・同町教育委員会の協力を得られる見込みとなったことから、平成17年度から調査を開始した。全体を5か年で行う予定である。

平成17年度から平成19年度の3か年の調査で、確認し位置を記録した竪穴は総数663軒である。竪穴のまとめりとして確認できた範囲は30か所である。

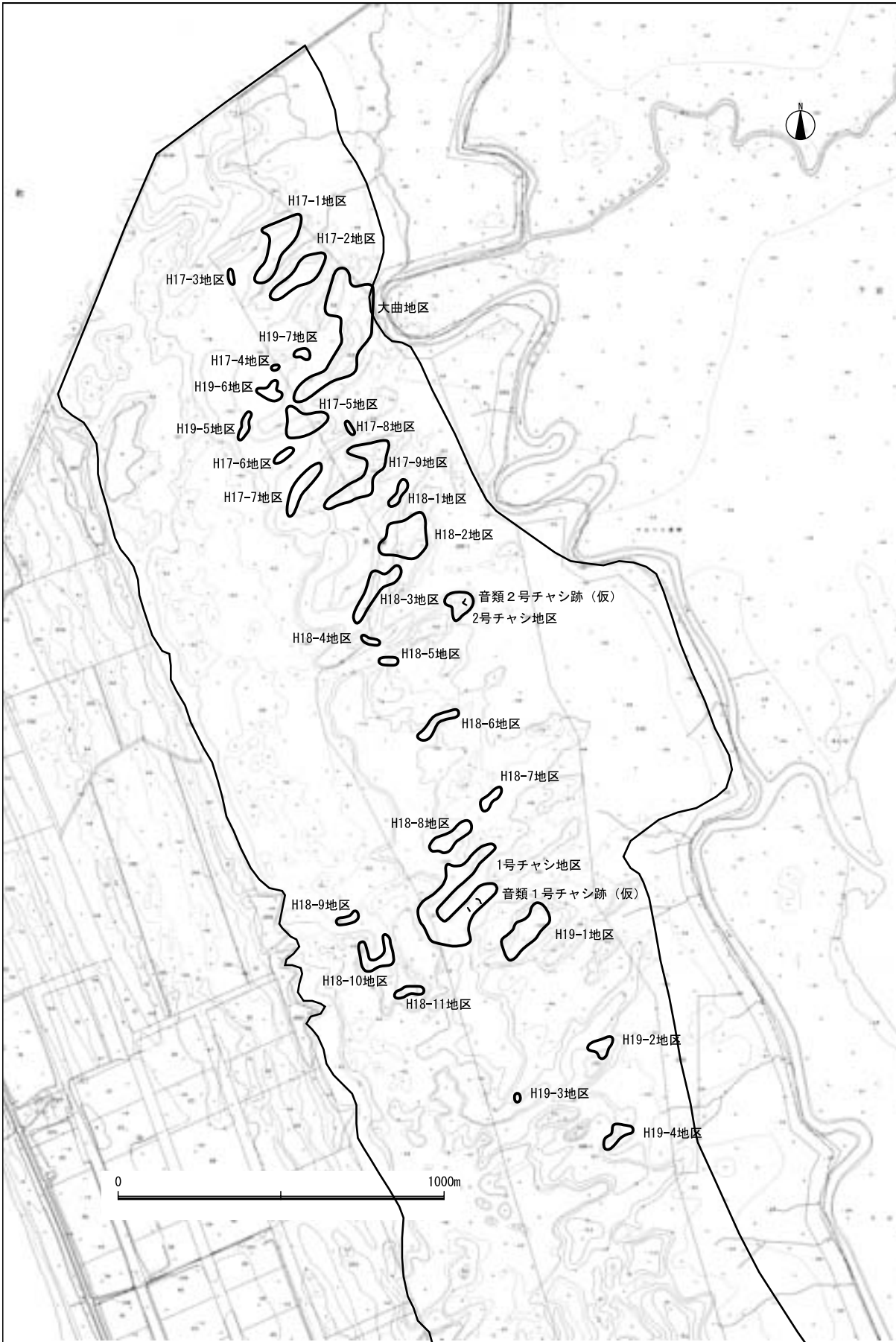
これまでの調査で遺跡範囲北側の踏査がほぼ終了した。また、音類橋北側の一部の踏査を行っており、踏査予定範囲の3分の2が終了している。

竪穴は、サロベツ川に面する砂丘上の北東-南西方向へのびる尾根上に多く立地している。一部は尾根から湿地へ向かう低位部にも見られる。分布は「大曲地区」周辺が最も多い。この地域はサロベツ川が砂丘に最も接近する場所である。サロベツ川が砂丘から遠ざかる地区では少なくなり、再び砂丘に近づく地区では「1号チャシ地区」「H19-1地区」など、竪穴が増加する傾向がうかがえる。また、「H18-9・10・11地区」のように、従来竪穴が存在しないと考えられてきた砂丘列の日本海側で竪穴が確認されている。また、平成17年度と平成18年度の調査時にそれぞれチャシ跡が発見された。サロベツ川筋では初めての発見である。

詳細は、別に刊行した報告書に掲載している。



遺跡遠景（幌延ビジターセンターより）



確認した豎穴群の位置

## (2) 大会・研究会・研修会参加

平成19年 5月24日（木）～25日（金） 平成19年度全国公立埋蔵文化財センター連絡協議会総会

場 所：鳥根県松江市

参加者：副所長 畑 宏明 総務部業務課課長 菅野 聡

7月13日（金）・14日（土） 第19回埋蔵文化財写真技術研究会

場 所：奈良県 奈良文化財研究所平城宮跡資料館講堂

参加者：第1調査部第1調査課主査 立川トマス

10月4日（木）・5日（金） 全国公立埋蔵文化財センター連絡協議会北海道・東北ブロック  
会議

場 所：北海道札幌市

参加者：第1調査部長 越田賢一郎 第1調査部普及活用課主査 藤本昌子  
総務部総務課課長 松本 繁

11月1日（木）・2日（金） 平成19年度全国公立埋蔵文化財センター連絡協議会第2回役員  
会

場 所：岡山県岡山市

参加者：副所長 佐藤俊和 総務部総務課課長 松本 繁

11月21日（木）・22日（金） 平成19年度全国公立埋蔵文化財センター連絡協議会研修会

場 所：沖縄県那覇市

参加者：総務部長 松本昭一 総務部業務課主査 礪田千秋  
総務部業務課主任 小笠原学

平成20年 2月27日～29日 保存科学研究集会2008 - 壁画古墳の保存に関わる諸問題 -

場 所：奈良県奈良市

参加者：第1調査部第1調査課 課長 田口 尚

## (3) 市町村等協力

平成19年 4月1日～平成21年 3月31日

北広島市文化財保護審議委員の委託

第1調査部普及活用課 主任 藤井 浩

平成19年 4月23日～平成20年 3月31日

厚真町内出土脆弱遺物資料の保存処理・保管方法に関する指導

第1調査部第1調査課 課長 田口 尚

平成19年 8月28日～29日 北海道大学豊浦町小幌洞窟発掘調査発掘トレンチ土層断面剥離標本作成及  
び指導

第1調査部第1調査課 課長 田口 尚

平成19年 9月5日 厚真町発見の丸木舟に関する運搬方法および保存処理に関する指導

第1調査部第1調査課 課長 田口 尚

平成20年 1月17日 文化資源プロジェクト「常呂町栄浦第2遺跡出土の箱形開孔板綜統のレプリカも  
しくは模造品の制作及び周辺情報の科学分析」の会議出席

第1調査部第1調査課 課長 田口 尚

## 5 収蔵・保管事業の概要

### (1) 収蔵資料目録

出土文化財を北海道出土文化財取扱要綱（平成13年4月11日付け教育庁・出納局長通知）等に則して保管し、いつでも活用できるよう管理を行い、整理作業を進めている。

収蔵資料目録の中で、網掛け分が今年度新たに収蔵したものである。また、報告書ごとの復元個体数も掲載した。

	シリーズ名称	発行年度	報告書名	所在地	遺跡名	掲載遺物 コンテナ数	その他 コンテナ数	復元土器 個体数
1	道教委 1	昭和52	1977	美沢川流域の遺跡群Ⅰ	千歳市 美々4	5	140	1
2	道教委 1	昭和52	1977	美沢川流域の遺跡群Ⅰ	千歳市 美々5	1	1	0
3	道教委 3	昭和54	1979	美沢川流域の遺跡群Ⅲ	千歳市 美々4	3	152	15
4	道教委 3	昭和54	1979	美沢川流域の遺跡群Ⅲ	千歳市 美々5	11	74	0
5	道教委 3	昭和54	1979	美沢川流域の遺跡群Ⅲ	千歳市 美々6	2	13	0
6	道教委 3	昭和54	1979	美沢川流域の遺跡群Ⅲ	千歳市 美々7	7	42	0
7	b	昭和54	1979	大麻1 西野幌1・3 東野幌3	江別市 大麻1	4	52	15
8	b	昭和54	1979	大麻1 西野幌1・3 東野幌3	江別市 西野幌1	3	36	8
9	b	昭和54	1979	大麻1 西野幌1・3 東野幌3	江別市 西野幌3	1	5	4
10	b	昭和54	1979	大麻1 西野幌1・3 東野幌3	江別市 東野幌1	2	65	3
11	北埋調報 2	昭和55	1980	大麻1遺跡	江別市 大麻1	2	37	8
12	北埋調報 3	昭和55	1980	美沢川流域の遺跡群Ⅳ	千歳市 美々4	6	365	108
13	北埋調報 3	昭和55	1980	美沢川流域の遺跡群Ⅳ	千歳市 美々5	3	50	5
14	北埋調報 3	昭和55	1980	美沢川流域の遺跡群Ⅳ	千歳市 美々6	2	16	3
15	北埋調報 3	昭和55	1980	美沢川流域の遺跡群Ⅳ	千歳市 美々7	1	4	3
16	北埋調報 5	昭和56	1981	吉井の沢の遺跡	江別市 吉井の沢1	17	162	43
17	北埋調報 5	昭和56	1981	吉井の沢の遺跡	江別市 大麻24	1	20	0
18	北埋調報 5	昭和56	1981	吉井の沢の遺跡	江別市 大麻25	1	6	0
19	北埋調報 7	昭和56	1981	美沢川流域の遺跡群Ⅴ	千歳市 美々8	1	91	117
20	北埋調報 8	昭和57	1982	美沢川流域の遺跡群Ⅵ	千歳市 美々8	1	5	9
21	北埋調報 9	昭和57	1982	ママチ遺跡	千歳市 ママチ	9	161	73
22	北埋調報 14	昭和58	1983	美沢川流域の遺跡群Ⅶ	千歳市 美々4	9	166	143
23	北埋調報 14	昭和58	1983	美沢川流域の遺跡群Ⅶ	千歳市 美々9	1	2	4
24	北埋調報 17	昭和59	1984	美沢川流域の遺跡群Ⅷ	千歳市 美々4	3	33	32
25	北埋調報 17	昭和59	1984	美沢川流域の遺跡群Ⅷ	千歳市 美々5	1	5	0
26	北埋調報 24	昭和60	1985	美沢川流域の遺跡群Ⅸ	千歳市 美々2	9	53	4
27	北埋調報 24	昭和60	1985	美沢川流域の遺跡群Ⅸ	千歳市 美々4	5	57	0
28	北埋調報 24	昭和60	1985	美沢川流域の遺跡群Ⅸ	千歳市 美々8	1	7	5
29	北埋調報 25	昭和60	1985	西野幌11遺跡	江別市 西野幌11	2	13	0
30	北埋調報 35	昭和61	1986	美沢川流域の遺跡群Ⅹ	千歳市 美々3	2	13	4
31	北埋調報 36	昭和61	1986	ママチ遺跡Ⅲ	千歳市 ママチ	8	84	75
32	北埋調報 39	昭和61	1986	西野幌3遺跡	江別市 西野幌3	3	9	6
33	北埋調報 44	昭和62	1987	美沢川流域の遺跡群ⅩⅠ	千歳市 美々8	2	42	27
34	北埋調報 48	昭和62	1987	西野幌11・13・14 下学田	江別市 西野幌11	2	8	9
35	北埋調報 48	昭和62	1987	西野幌11・13・14 下学田	江別市 西野幌13	1	2	0
36	北埋調報 48	昭和62	1987	西野幌11・13・14 下学田	江別市 西野幌14	2	8	0
37	北埋調報 48	昭和62	1987	西野幌11・13・14 下学田	江別市 下学田	0	0	0
38	北埋調報 54	昭和63	1988	西野幌12遺跡	江別市 西野幌12	13	140	27
39	北埋調報 62	平成1	1989	美沢川流域の遺跡群ⅩⅢ	千歳市 美々3	2	39	7
40	北埋調報 62	平成1	1989	美沢川流域の遺跡群ⅩⅢ	千歳市 美々8	1	42	72
41	北埋調報 69	平成2	1990	美沢川流域の遺跡群ⅩⅤ	千歳市 美々3	14	134	34
42	北埋調報 69	平成2	1990	美沢川流域の遺跡群ⅩⅤ	千歳市 美々8低湿部	0	0	0
43	北埋調報 77	平成3	1991	美沢川流域の遺跡群ⅩⅤ	千歳市 美々3	4	10	31
44	北埋調報 77	平成3	1991	美沢川流域の遺跡群ⅩⅤ	千歳市 美々7	3	14	12
45	北埋調報 77	平成3	1991	美沢川流域の遺跡群ⅩⅤ	千歳市 美々8	3	37	16
46	北埋調報 77	平成3	1991	美沢川流域の遺跡群ⅩⅤ	千歳市 美々8低湿部	1	0	2
47	北埋調報 83	平成4	1992	美沢川流域の遺跡群ⅩⅥ	千歳市 美々7	3	11	7
48	北埋調報 83	平成4	1992	美沢川流域の遺跡群ⅩⅥ	千歳市 美々8	2	59	72
49	北埋調報 83	平成4	1992	美沢川流域の遺跡群ⅩⅥ	千歳市 美々8低湿部	1	0	1
50	北埋調報 86	平成5	1993	ユカンボシC2遺跡	千歳市 ユカンボシC2	4	24	14
51	北埋調報 89	平成5	1993	美沢川流域の遺跡群ⅩⅦ	千歳市 美々8	1	0	84
52	北埋調報 90	平成5	1993	オサットー1・キウス7遺跡	千歳市 オサットー1	1	0	0
53	北埋調報 90	平成5	1993	オサットー1・キウス7遺跡	千歳市 キウス7	4	14	13
54	北埋調報 92	平成6	1994	キウス5・7(2)・ケネフチ8遺跡	千歳市 キウス5	9	33	12
55	北埋調報 92	平成6	1994	キウス5・7(2)・ケネフチ8遺跡	千歳市 キウス7	1	5	7
56	北埋調報 92	平成6	1994	キウス5・7(2)・ケネフチ8遺跡	千歳市 ケネフチ8	1	5	0
57	北埋調報 96	平成6	1994	オサツ2・14遺跡	千歳市 オサツ2	4	20	117
58	北埋調報 96	平成6	1994	オサツ2・14遺跡	千歳市 オサツ14	7	31	16
59	北埋調報 100	平成7	1995	ユカンボシC9遺跡	千歳市 ユカンボシC9	3	25	33
60	北埋調報 102	平成7	1995	美沢川流域の遺跡群ⅩⅧ	千歳市 美々8	0	0	14

	シリーズ名称	発行年度	報告書名	所在地	遺跡名	掲載遺物 コンテナ数	その他 コンテナ数	復元土器 個体数		
61	北埋調報 102	平成7	1995	美沢川流域の遺跡群XⅧ	千歳市	美々8低湿部	2	168	10	
62	北埋調報 103	平成7	1995	オサツ2遺跡(2)	千歳市	オサツ2	5	0	30	
63	北埋調報 104	平成7	1995	キウス5遺跡(2)	千歳市	キウス5	9	89	18	
64	北埋調報 105	平成7	1995	キウス7遺跡(3)	千歳市	キウス7	15	97	110	
65	北埋調報 113	平成8	1996	美沢川流域の遺跡群XⅨ	千歳市	美々4	12	343	229	
66	北埋調報 114	平成8	1996	美沢川流域の遺跡群XⅩ	千歳市	美々8低湿部	1	0	0	
67	北埋調報 115	平成8	1996	キウス5遺跡(3)	千歳市	キウス5	17	113	254	
68	北埋調報 116	平成8	1996	キウス5遺跡(4)B・C地区	千歳市	キウス5	9	24	17	
69	北埋調報 117	平成8	1996	キウス7遺跡(4)	千歳市	キウス7	8	29	0	
70	北埋調報 119	平成8	1996	キウス4遺跡	千歳市	キウス4	4	37	1	
71	北埋調報 124	平成9	1997	キウス4遺跡(2)	千歳市	キウス4	24	377	121	
72	北埋調報 125	平成9	1997	キウス5遺跡(5)A2地区	千歳市	キウス5	11	151	159	
73	北埋調報 126	平成9	1997	キウス5遺跡(6)A・C地区	千歳市	キウス5	4	46	1	
74	北埋調報 127	平成9	1997	キウス7遺跡(5)	千歳市	キウス7	6	16	5	
75	北埋調報 128	平成9	1997	ユカンボシC15遺跡(1)	千歳市	ユカンボシC15	3	36	81	
76	北埋調報 133	平成10	1998	ユカンボシC15遺跡(2)	千歳市	ユカンボシC15	14	283	63	
77	北埋調報 134	平成10	1998	キウス4遺跡(3)A H K I地区	千歳市	キウス4	42	302	234	
78	北埋調報 135	平成10	1998	キウス4遺跡(4)A2地区	千歳市	キウス4	5	39	14	
79	北埋調報 136	平成10	1998	キウス5(7)キウス7(6)遺跡	千歳市	キウス5	1	0	0	
80	北埋調報 136	平成10	1998	キウス5(7)キウス7(6)遺跡	千歳市	キウス7	1	1	0	
81	北埋調報 138	平成11	1999	柏台1遺跡	千歳市	柏台1	26	22	0	
82	北埋調報 144	平成11	1999	キウス4遺跡(5)	千歳市	キウス4	11	33	40	
83	北埋調報 146	平成11	1999	ユカンボシC15遺跡(3)	千歳市	ユカンボシC15	1	46	14	
84	北埋調報 147	平成11	1999	対雁2遺跡(1)	江別市	対雁2	2	42	14	
85	北埋調報 148	平成11	1999	キウス4遺跡(6)	千歳市	キウス4	7	16	2	
86	北埋調報 152	平成12	2000	キウス4遺跡(7)	千歳市	キウス4	18	109	45	
87	北埋調報 157	平成12	2000	キウス4遺跡(8)	千歳市	キウス4	49	519	380	
88	北埋調報 159	平成12	2000	ユカンボシC15遺跡(4)	千歳市	ユカンボシC15	1	1	3	
89	北埋調報 160	平成12	2000	対雁2遺跡(2)	江別市	対雁2	5	32	41	
90	北埋調報 173	平成13	2001	チブニー1・チブニー2遺跡	千歳市	チブニー1	4	14	33	
91	北埋調報 173	平成13	2001	チブニー1・チブニー2遺跡	千歳市	チブニー2	1	5	0	
92	北埋調報 174	平成13	2001	ケネフチ9遺跡	千歳市	ケネフチ9	2	10	1	
93	北埋調報 176	平成13	2001	ユカンボシC15遺跡(5)	千歳市	ユカンボシC15	0	0	0	
94	北埋調報 177	平成13	2001	対雁2遺跡(3)	江別市	対雁2	1	6	69	
95	北埋調報 180	平成14	2002	キウス4遺跡(9)	千歳市	キウス4	90	1623	696	
96	北埋調報 187	平成14	2002	キウス4遺跡(10)	千歳市	キウス4	0	0	0	
97	北埋調報 188	平成14	2002	オリイカ1遺跡	千歳市	オリイカ1	2	32	2	
98	北埋調報 189	平成14	2002	オリイカ2遺跡	千歳市	オリイカ2	5	17	4	
99	北埋調報 192	平成14	2002	ユカンボシC15遺跡(6)	千歳市	ユカンボシC15	0	59	0	
100	北埋調報 193	平成14	2002	対雁2遺跡(4)	江別市	対雁2	41	81	36	
101	北埋調報 204	平成15	2003	対雁2遺跡(5)	江別市	対雁2	3	5	11	
102	北埋調報 206	平成15	2003	オリイカ1遺跡(2)	千歳市	オリイカ1	1	2	2	
103	北埋調報 207	平成15	2003	チブニー2遺跡(2)	千歳市	チブニー2	2	12	12	
104	北埋調報 215	平成16	2004	対雁2遺跡(6)	江別市	対雁2	0	1	0	
105	北埋調報 221	平成17	2005	オリイカ2遺跡(2)	千歳市	オリイカ2	23	34	10	
106	北埋調報 225	平成17	2005	チブニー2遺跡(3)	千歳市	チブニー2	31	7	27	
107	北埋調報 226	平成17	2005	対雁2遺跡(7)	江別市	対雁2	16	38	41	
108	北埋調報 231	平成18	2006	対雁2遺跡(8)	江別市	対雁2	33	49	429	
109	北埋調報 238	平成18	2006	祝梅川上田遺跡・梅川2遺跡	千歳市	梅川2	3	5	6	
110	北埋調報 238	平成18	2006	祝梅川上田遺跡・梅川2遺跡	千歳市	祝梅川上田	5	9	4	
111	北埋調報 240	平成18	2006	対雁2遺跡(9)	江別市	対雁2	13	14	22	
112	北埋調報 251	平成19	2007	キウス5遺跡(8)	千歳市	キウス5	3	17	10	
113	北埋調報 252	平成19	2007	キウス9遺跡	千歳市	キウス9	13	49	181	
114	北埋調報 255	平成18	2006	対雁2遺跡(10)	江別市	対雁2	1	2	4	
(道教委・道埋文センター発掘調査分)						合	計	822	7704	4801
1	保第 2	平成7	1995	ボンオサツ・ケネフチ5	千歳市	ボンオサツ	2	1	18	
2	保第 2	平成7	1995	ボンオサツ・ケネフチ5	千歳市	ケネフチ5	5	42	0	
3	保第 3	平成7	1995	オサツ15・16・18	千歳市	オサツ15	1	14	1	
4	保第 3	平成7	1995	オサツ15・16・18	千歳市	オサツ16	4	44	14	
5	保第 3	平成7	1995	オサツ15・16・18	千歳市	オサツ18	1	1	0	
6	保第 5	平成8	1996	ボンオサツ(2)・オサツ18(2)・ケネフチ5(2)	千歳市	ボンオサツ	1	1	0	
7	保第 5	平成8	1996	ボンオサツ(2)・オサツ18(2)・ケネフチ5(2)	千歳市	オサツ18	1	1	8	
8	保第 5	平成8	1996	ボンオサツ(2)・オサツ18(2)・ケネフチ5(2)	千歳市	ケネフチ5	5	14	2	
9	保第 6	平成8	1996	オサツ15(2)	千歳市	オサツ15	5	47	7	
10	保第 7	平成8	1996	オサツ16(2)	千歳市	オサツ16	13	28	8	
11	保第 8	平成9	1997	オサツ15(3)	千歳市	オサツ15	6	26	4	
12	保第 9	平成9	1997	オサツ16(3)	千歳市	オサツ16	2	14	0	
13	保第 10	平成9	1997	ケネフチ5(3)	千歳市	ケネフチ5	11	68	23	
(保護協会発掘調査分)						合	計	57	301	85
総 合 計								879	8005	4886

## 6 普及・啓発事業の概要

### (1) 展示活動

#### a 常設展示「掘り出された北の歴史」

常設展示にあたっては、国（文化庁）をはじめ、函館市・北斗市・今金町・木古内町・余市町・登別市の各教育委員会、市立函館博物館、知内町郷土資料館、芦別市星のふる里百年記念館に、展示品借用についての協力を得ている。

また、テーマ展との関係から、展示室・ホールとの併用で展示を行っている。

#### [千歳市ママチ遺跡出土土面展示]

国指定重要文化財の「土面」（国保有、昭和63年6月6日指定）を常設展示している。「土面」は千歳市ママチ遺跡から昭和61年に出土、縄文時代晩期終末のもので、土面としては最も北方から出土したものである。

#### [遺跡調査と保護活用]

北海道内の遺跡分布、遺跡の調査・整理作業の実際、遺物の分析・保存処理の方法などについての解説。また国指定重要文化財の複製品も展示している。

#### [石の道具]

石は、人類が最初に利用した素材の一つである。旧石器時代の石の道具は、破片の接合から高度な技術で製作されたことが明らかとなった。遠軽町（旧白滝村）白滝遺跡群、千歳市柏台1遺跡、今金町ピリカ遺跡（国指定史跡）、木古内町新道4遺跡出土の石器、接合資料などを展示した。また、縄文時代には用途に応じて、それに合う石材を利用し、様々な形の石器が作られた。その使用方法を図と復元模型でわかりやすく示している。

#### [木の道具]

木の道具は、通常の遺跡では腐って残らないが、実際の生活の中では各所に使われていた。そのため低湿性遺跡など腐食しにくい状況で出土した木の道具は、昔の人々の生活の様子を大変良く伝えてくれる。千歳市美々8遺跡低湿部のアイヌ文化期の遺物のほか、ユカンボシC15遺跡の丸木舟、キウス4遺跡の縄文時代後期の脚付き容器などを展示している。展示品は保存処理後の遺物である。

千歳市美々8遺跡低湿部出土品は、平成17年6月9日国指定重要文化財に指定され、その一部を常設展示している。また、美々8遺跡の「美々ムラ」復元模型を置いている。

#### [金属の道具]

金属の道具は、人類が新しく手にしたものの一つである。刀・刀子・鍋等は交易品として北海道に入ってきたものが多く、それら道具類を手に入れるための交易が、北海道社会を変容させる一つの要因となった。

金属製品も腐食しやすい材質であり、展示品は保存処理を行っている。

#### [土の道具：土と火の造形]

粘土を成形し火で焼き上げた土器は、人類が最初に手に入れた火にかけられる容器である。土器によって、食材の利用範囲が大きく拡大し、縄文時代の安定がもたらされたと考えられている。土器は自由な造形ができる粘土を使用しているため、時代とともに文様や形が様々な変化しており、時には機能を超越した、変わった形態や美しさをかもし出すものがある。

[こころの道具]

「装いところ」：身を飾った装身具には、ヒスイ製、コハク製などの各種玉、玦状耳飾り、土製の耳栓などがあり、当時の人々のおしゃれごころや精神生活の一端をみせてくれる。

「墓と副葬品」：墓の副葬品は、当時の生活用具をセットでみせてくれるとともに、当時の人々の「死」に対する恐れ、悲しみなど、「こころ」の一面をのぞかせてくれる。

「動物とひと」：動物意匠の土器、動物形石製品などは、人と動物とのふれあいを感じさせる。表現される動物たちに、何を感じ、何を求めていたのか、当時の人々の自然と対峙する生活の一端を考えさせられる。

[キウスの縄文村]

千歳市キウス4遺跡の発掘調査から、周堤墓、盛土遺構、住居跡などをジオラマに復元、合成樹脂で剥ぎ取った盛土遺構土層断面を展示している。盛土遺構の出土遺物には、祭祀に使われたと考えられる赤彩の土器、特殊な形の土器・土製品、玉類、土偶などがある。

[ビデオコーナー]

遺跡についてわかりやすく解説した『ビビちゃんとフクロウ博士の遺跡ってなーに』『ビビちゃんとフクロウ博士の発掘体験』『ビビちゃんとフクロウ博士の縄文生活体験』などを常時上映している。

[体験コーナー]

石器コーナー：石器を使ったドングリの皮むき、石器の接合、石器の紙切り体験。石器の材料となる石材見本展示

火起し体験コーナー：キリモミ、ヒモキリ、マイキリによる火起し体験

装身具コーナー：様々な材質のペンダント装着体験

土器コーナー：土器拓本体験、煮炊きに使った復元土器の展示

[常設展示点数一覧]

展 示 場 所 ・ コ ー ナ ー		遺物 点数	パネル・レプリカなど	合計 点数	
ホール・展示回廊		0	9	9	
常設展示室	受付・導入部分	2	5	7	
	「遺跡調査と保護活用」部分	遺跡調査	2	63	65
		遺物の保存と分析	0	61	61
	「石の道具」部分	旧石器時代の石器	142	10	152
		縄文時代の石器	128	18	146
	「木の道具」部分	縄文時代の木製品	6	16	22
		アイヌ文化期の木製品	32	14	46
	「金属の道具」部分	24	13	37	
	「骨の道具」部分	3	2	5	
	「土の道具」部分	203	22	225	
	「こころの道具」部分	装いところ	757	9	766
墓と副葬品		114	3	117	
動物とひと		15	10	25	
「キウスの縄文ムラ」部分	52	11	63		
「新しい時代へ」	19	1	20		
屋外	エントランスひろば	0	1	1	
	中庭	0	1820	1820	
合 計		1499	2088	3587	

## b 特別展示

### ○『わかる考古学1 縄文生活体験ひろばーふれる・つくる・つかう、体感する考古学ー』展

[会期] 平成19年7月7日(土)～8月26日(日)

[展示のねらい]

考古学の成果をわかりやすく紹介する企画「わかる考古学」の第1回目で、勾玉づくりや耳飾りづくりなど主に縄文時代の装飾品づくりを通して、埋蔵文化財をより身近なものとして体感する場をつくることを目的とした。

[展示構成]

#### 【縄文アクセサリ工房】(ホール)

実物を観察し、「カタログ」「レシピ(つくりかた手順)」を参考にして自分で素材や道具を選び、縄文アクセサリをつくる体験ができる。主に以下の内容で製作体験ができる

『縄文ネックレスに挑戦』：いろいろな種類の玉をつくり、組み合わせて腕輪やネックレスにする。

「勾玉をつくる」：滑石を磨いてミニチュア勾玉をつくる。

「丸玉・管玉・白玉・小玉をつくる」：滑石を磨いているいろいろな種類の玉をつくる。

「縄文ペンダントをつくる」：滑石を磨いてペンダント(垂飾)をつくる。

「土製の玉をつくる」：オープン粘土を使って、土製玉をつくる。

『耳飾りに挑戦』：粘土や滑石を用いて耳飾り、スタンプ形の飾りをつくる。

「土製耳飾り・耳栓をつくる」：オープン粘土を使って、土製の耳飾りをつくる。

「けつ状耳飾りをつくる」：滑石を磨いてけつ状耳飾りをつくる。

『土面をつくる』：ママチ遺跡の土面(重要文化財)を手本に、紙粘土で土面をつくる。

#### 【縄文文化に触れる・道具を使う】

(展示廊下)

土器や石器等、縄文時代の各時期の遺物を揃え、触れて観察する場をつくる。また、レプリカを使って道具の使用法を体験する。



縄文アクセサリ工房



勾玉をつくる

『じょうもんタッチ』：土器や石器に直接触れて観察する。

『縄文模様図鑑をつくる』：本物の縄文土器から模様を写しとる「拓本」に挑戦する。

『火おこし』：きりもみ式、ひもぎり式、弓ぎり式での火おこし体験。

『石器を使う』：ナイフで紙や皮を切り、たたき石で木の実をすりつぶすなどの体験

【マスターコース】(体験コーナー)

勾玉作りや火おこしの準備など、縄文生活体験ひろばの裏側を体験することができる。

(勾玉素材の準備、火おこし軸木のカット、砥石の清掃などの手伝いを含む)

[展示企画] 藤井 浩

付記：「縄文生活体験展」の広報と入館者数について

「縄文生活体験展」は、平成17年度からおもに夏休み期間中の児童・生徒向け体験型展示として実施している。開催前には以下に記した近隣の小中学校に、広報を行っている。

また、平成19年度については、体験展参加の際に記入していただいた「参加カード」から、参加者の地域別、年齢別のグラフを示す。

・平成17年度 特別展として開催

会期：6月24日(金)～8月28日(日) 57日間

期間中の入館者数：2,121名 1日あたりの入館者数：37名

広報範囲：江別市内 小学校19校、中学校10校

・平成18年度 夏休み期間中の体験コーナーイベントとして開催

会期：7月26日(水)～8月31日(木) 32日間

期間中の入館者数：1,603名 1日あたりの入館者数：50名

広報範囲：センター近隣の小中学校 江別市(小19、中10)

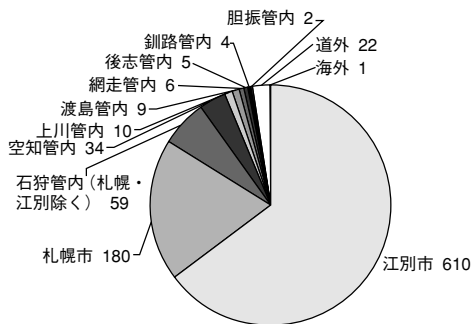
札幌市の厚別区・清田区・白石区(小53、中25)

・平成19年度 特別展として開催

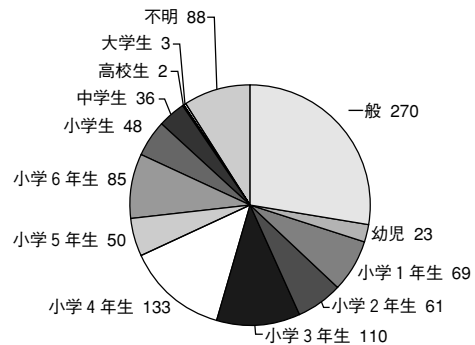
会期：7月7日(土)～8月26日(日) 44日間

期間中の入館者数：2,734名 1日あたりの入館者数：62名

広報範囲：おもに隣接する市町村の小学校 札幌市209、江別市19、北広島市10、岩見沢市15、当別町4、南幌町3、新篠津村1、長沼町5



地域別参加者数



年齢別参加者数

○『交流の考古学3 一船一』展

[会期] 平成19年9月29日(土)～11月18日(日)

[展示のねらい]

船に関わる出土遺物から、本州、大陸などからモノの輸送に使用された船が北海道の歴史に与えた影響を展示を通して探りながら、埋蔵文化財の保護について理解を深めることを目的とした。

[協力機関]

北海道大学総合博物館、北海道開拓記念館、北海道立北方民族博物館、札幌市教育委員会、いしかり砂丘の風資料館、函館市教育委員会、余市町教育委員会、利尻町教育委員会、苫小牧市博物館、羅臼町教育委員会

[展示構成]

- (1) 各時代の船関連遺物  
縄文の船、続縄文の船、オホーツクの船、擦文の船、アイヌ文化の船
- (2) 海を越えた交流によりもたらされた品々  
本州から：ヒスイ、赤彩土器、須恵器  
大陸から：陶磁器、銭貨
- (3) 船からみる先史時代の生業  
鯨漁、海獣狩猟、アワビ漁

[展示企画] 倉橋直孝

\* 詳細は、特別展示概要を参照。



「交流の考古学3 一船一」展示状況

## ○『わかる考古学2 北海道遺跡百選—遺跡との出会い—』展

[会期] 平成20年1月5日(土)～3月2日(日)

[展示のねらい]

考古学の成果をわかりやすく紹介する特別展示「わかる考古学」の第2回目で、「北海道の遺跡」をテーマにとりあげる。遺跡地図や写真などにより、道内のどこに、どんな遺跡があるかを整理して紹介し、来館者にとって埋蔵文化財の存在がより身近なものになることを展示の目的とした。

[協力機関]

いしかり砂丘の風資料館、浦幌町立博物館、恵庭市教育委員会、小樽市教育委員会、上ノ国町教育委員会、標津町教育委員会、厚岸町教育委員会、江別市教育委員会、釧路市立博物館、札幌大学埋蔵文化財展示室、市立函館博物館、森町教育委員会、千歳市埋蔵文化財センター、帯広百年記念館、洞爺湖町教育委員会、苫小牧市博物館、北海道大学埋蔵文化財調査室、北見市教育委員会、余市町教育委員会、利尻町立博物館、斜里町立知床博物館、根室市歴史と自然の資料館

[展示構成]

### (1) 遺跡との出会い

20万分の1遺跡位置図から北海道の遺跡分布を概観した。

### (2) 北海道遺跡百選

1万2千箇所ある北海道の全遺跡一覧表を中心に、旧石器時代からアイヌ文化期までの道内の代表的な遺跡を写真パネルなどで紹介した。これらの遺跡を百選候補として、来館者の投票によって今年の百選を選出した。

### (3) みんなの遺跡百選

投票結果、アンケート結果は随時展示室内で発表した。また、最終結果については展示室、ホームページ上で紹介した。

[展示企画] 藤井 浩



「わかる考古学2—北海道遺跡百選—」展示状況

**c トピック展示：『(財)北海道埋蔵文化財センター平成18年度遺跡発掘調査成果展』**

[会期] 平成19年3月27日(火)から6月10日(日)

[展示のねらい]

財団法人北海道埋蔵文化財センターが平成18年度に実施した発掘調査成果を、出土した遺物を中心に写真、パネルなどで時期別に紹介した。

[展示内容]

**【遺物とパネル等で紹介】**

恵庭市西島松2遺跡	縄文前期・後晩期土器、縄文後晩期石器
恵庭市柏木川4遺跡	縄文晩期墓出土土器(手形・足形付土製品は会期前半のみ出展)・墓模型・擦文土器・石器
千歳市キウス9遺跡	縄文晩期・擦文土製品(土玉)・縄文早期石刃鏃(会期後半のみ出展)
千歳市キウス5遺跡	擦文土器・土製品・縄文石製品
千歳市梅川4遺跡	縄文晩期土器
千歳市祝梅川上田遺跡	旧石器時代石器群・鉄鍋などアイヌ文化期金属製品
江別市対雁2遺跡	縄文晩期～続縄文土器
白老町杖杖浜2遺跡	縄文前期貝塚出土の石器、骨角器
北斗市矢不來8遺跡	縄文後期前葉土器
北斗市矢不來10遺跡	箱館戦争当時の銃弾
下川町前サンル1遺跡	珪岩製石器
遠軽町旧白滝5遺跡	旧石器時代石器群
釧路町天寧1遺跡	縄文中～後期の貝塚出土の骨角器、盛土遺構の人骨出土状況を3次元画像で再現

**【パネル・写真で紹介】**

白糠町上茶路遺跡・占冠村占冠原野1遺跡・赤井川村日の出2遺跡・赤井川村板小屋沢遺跡・千歳市梅川2遺跡

北海道立埋蔵文化財センター重要遺跡確認調査の紹介：幌延町音類竪穴群

保存処理・分析作業の紹介：保存処理・分析などの詳細内容、市町村協力の内容など

[展示企画] 財団法人北海道埋蔵文化財センター調査部



「発掘調査成果展」展示状況

#### d 周辺施設との連携

北海道開拓記念館が主体となり、周辺施設と連携してゴールデンウィーク期間中に行う「ウォークラリー」に参加した。平成18年度から行っている。期間中（4日間）の来館者は719名であった。

「歴史発見！自然発見！ウォークラリー2007」開催要項（北海道開拓記念館教育普及課作成）

■主催 催：北海道開拓記念館・北海道開拓の村・埋蔵文化財センター・自然ふれあい交流館

■対象 象：小中学生

（参加者は小中学生だが家族連れもターゲットとする）

（兄弟などで未就学児、高校生なども参加を希望する場合には拒否しない）

■開催日：2007年5月3日（木）～6日（日） 4日間

■開催場所：開拓記念館・開拓の村・自然ふれあい交流館・埋蔵文化財センター

■開催時間：スタート（受付）時間 9時30分～16時00分（最終日は15時00分で締め切り）  
ゴール時間 各施設の閉館時間まで

■内容：事前申込は不要。

\*スタートは（受付）は、4施設のいずれでも可能。

\*参加希望者は、受付時間内に4施設のいずれかに来て受付する。

\*スタート地点で「秘密指令書」と「カード」を受け取る。

\*各自が4日間のうちに好きな順序・好きなペースで4施設を訪ね、4つのシールを集めて、「カード」を完成させる。

\*各施設では、それぞれの施設の指令をクリアーして、シールを手に入れる。

\*4施設のうち3施設以上をまわればクリアーとなり、ゴール地点で記念品がもらえる（ただし4施設をまわらなければ「カード」は完成しない。4施設をまわると、そこでも記念品がもらえる）。

\*ゴールも、いずれの施設でも可能。

\*シールはゴールデンウィーク後も、各施設をまわればもらうことができる（ただし記念品はもらえない）。



## (2) 特別利用等の状況

### a 特別利用一覧

番号	利用者	使用目的	使用期間	利用資料名	備考
1	市立函館博物館 成田 光	特別企画展のため 資料調査	平成19年4月7日	キウス4遺跡出土土器ほか	
2	北海道大学 高倉 純	資料調査	平成19年4月7日	遠軽町白滝遺跡群出土土器	
3	平取町教育委員会 森岡健治	特別展のため 資料調査	平成19年4月28日	キウス4遺跡出土土器ほか	
4	國學院大學大学院 清水 香	論文資料作成資料調査	平成19年5月1日	千歳市美々8遺跡・ユカンボシC15遺跡出土常設展示資料	重文含まず
5	茨城県ひたちなか市埋蔵文化財調査センター 鈴木素行	資料調査	平成19年5月25日	千歳市美々4遺跡出土石棒 千歳市キウス4遺跡出土石棒破片	
6	北海道大学 高倉 純	資料調査	平成19年5月26・27日	遠軽町白滝遺跡群出土土器	
7	東京大学 安斎正人	資料調査	平成19年6月1日 6月2日	遠軽町白滝遺跡群出土土器	
8	北海道大学 高倉 純	資料調査	平成19年6月8日	遠軽町白滝遺跡群出土土器	
9	中国吉林大学 陳全家	資料調査	平成19年6月18日	遠軽町白滝遺跡群出土土器 千歳市柏台1遺跡出土資料 千歳市オリイカ2遺跡出土資料	
10	東京大学大学院 榊田朋広	資料調査	平成19年7月6日	千歳市オサツ2遺跡出土土器ほか	
11	北海道大学 高倉 純	資料調査	平成19年7月14日	遠軽町白滝遺跡群出土土器	
12	北海道大学 高倉 純	資料調査	平成19年7月21日	遠軽町白滝遺跡群出土土器	
13	北海道大学 高倉 純	資料調査	平成19年7月29日	遠軽町白滝遺跡群出土土器	
14	宙工房 川口英高	資料調査	平成19年7月29日	千歳市出土縄文土器ほか	
15	東京大学 林 和弘	資料調査	平成19年7月30日 ～31日	遠軽町白滝遺跡群出土土器 千歳市柏台1遺跡出土資料 千歳市オリイカ2遺跡出土資料	
16	東京大学 尾田識好	資料調査	平成19年7月30日 ～31日	遠軽町白滝遺跡群出土土器 千歳市柏台1遺跡出土資料 千歳市オリイカ2遺跡出土資料	
17	東京大学 役重みゆき	資料調査	平成19年7月30日 ～31日	遠軽町白滝遺跡群出土土器 千歳市柏台1遺跡出土資料 千歳市オリイカ2遺跡出土資料	
18	東北学院大学 大槻 巖	資料調査	平成19年8月10日	江別市吉井の沢遺跡出土土大式土器	
19	藪下詩乃	資料調査	平成19年8月17日	遠軽町白滝遺跡群出土土器	
20	札幌大学教授 木村英明	資料調査	平成19年8月17日	千歳市オリイカ2遺跡出土旧石器関連資料	
21	長野県立歴史館 谷 和隆	資料調査	平成19年8月23日	遠軽町白滝遺跡群出土土器	
22	東京経済大学 中村 豪	資料調査	平成19年8月26日	展示資料等	
23	中国社会科学院 考古研究所 王小慶	資料調査	平成19年8月27日 ～28日	千歳市柏台1遺跡出土資料 千歳市オリイカ2遺跡出土資料	
24	北海道大学大学院 赤井文人	資料調査	平成19年9月20日	千歳市オサツ16遺跡出土土器	継続利用
25	北海道大学大学院 赤井文人	資料調査	平成19年9月26日	千歳市オサツ16遺跡出土土器	継続利用
26	北海道大学 高倉 純	資料調査	平成19年9月29日	遠軽町白滝遺跡群出土土器	
27	北海道大学 高倉 純	資料調査	平成19年10月20日	遠軽町白滝遺跡群出土土器	継続利用
28	北海道大学 高倉 純	資料調査	平成19年11月11日	遠軽町白滝遺跡群出土土器	継続利用
29	大阪府豊中市 野村裕次郎	資料調査（展示方法ほか）	平成19年11月11日	千歳市美々4遺跡出土土器	
30	北海道大学 高倉 純	資料調査	平成19年11月18日	遠軽町白滝遺跡群出土土器	継続利用

番号	利用者	使用目的	使用期間	利用資料名・点数	備考
31	東北学院大学 大学院 高橋 潤	資料調査	平成19年11月29日	千歳市美々4遺跡ほか 動物形土製品等	
32	北海道大学 高倉 純	資料調査	平成19年11月25日	遠軽町白滝遺跡群出土石器	継続利用
33	北海道大学 高倉 純	資料調査	平成19年12月2日	遠軽町白滝遺跡群出土石器	継続利用
34	北海道大学 赤井文人	資料調査	平成19年12月11日	千歳市オサツ16遺跡出土石器	継続利用
35	北海道大学 赤井文人	資料調査	平成19年12月14日	千歳市オサツ16遺跡出土石器	継続利用
36	北海道大学 高倉 純	資料調査	平成19年12月15日	遠軽町白滝遺跡群出土石器	継続利用
37	北海道大学 赤井文人	資料調査	平成19年12月19日	千歳市オサツ16遺跡出土石器	継続利用
38	国学院大学大学院 清水 香	論文作成資料調査	平成19年12月20日	千歳市美々8遺跡・ユカンボシC15遺跡出土木製品	重文含む
39	北海道大学 香本佳彦	資料調査	平成19年12月21日	千歳市オルイカ2遺跡出土カワシンジュガイ	
40	北海道大学 赤井文人	資料調査	平成19年12月25日	千歳市オサツ16遺跡出土石器	継続利用
41	北海道大学 高倉 純	資料調査	平成20年1月6日	遠軽町白滝遺跡群出土石器	継続利用
42	北海道大学 高倉 純	資料調査	平成20年1月20日	遠軽町白滝遺跡群出土石器	継続利用
43	北海道大学 高倉 純	資料調査	平成20年2月2日 ～2月3日	遠軽町白滝遺跡群出土石器	継続利用
44	北海道大学 高倉 純	資料調査	平成20年2月9日 ～2月10日	遠軽町白滝遺跡群出土石器	継続利用
45	北海道大学 高倉 純	資料調査	平成20年2月17日	遠軽町白滝遺跡群出土石器	継続利用
46	江別市 平 一宏	資料調査	平成20年2月23日	千歳市キウス4遺跡出土注口土器ほか	
47	北海道大学 高倉 純	資料調査	平成20年2月23日	遠軽町白滝遺跡群出土石器	継続利用
48	北海道大学 高倉 純	資料調査	平成20年3月1日	遠軽町白滝遺跡群出土石器	継続利用
49	国立歴史民俗博物館 小林謙一	資料調査	平成20年3月5日	江別市大麻1遺跡出土土器	
50	厚真町教育委員会 奈良智法	資料調査	平成20年3月5日	千歳市美々8遺跡出土はばき	
51	北海道大学 赤井文人	資料調査	平成20年3月6日	千歳市オサツ16遺跡出土旧石器	継続利用
52	北海道大学 高倉 純	資料調査	平成20年3月9日	遠軽町白滝遺跡群出土石器	継続利用
53	北海道大学 赤井文人	資料調査	平成20年3月11日	千歳市柏台1遺跡出土旧石器	
54	北海道大学 赤井文人	資料調査	平成20年3月13日	千歳市柏台1遺跡出土旧石器	
55	北海道大学 赤井文人	資料調査	平成20年3月19日	千歳市キウス7遺跡、オサツ2遺跡、ユカンボシC15 遺跡出土旧石器	
56	北海道大学 高倉 純	資料調査	平成20年3月23日	遠軽町白滝遺跡群出土石器	継続利用
57	北海道大学 赤井文人	資料調査	平成20年3月25日	千歳市キウス7遺跡出土旧石器	
58	北海道大学 高倉 純	資料調査	平成20年3月30日	遠軽町白滝遺跡群出土石器	継続利用

b 模写品等使用承認一覧

番号	申請者	使用目的	利用資料名・点数	備考
1	北海道考古学会 運営委員 阿部明義	2007年度北海道考古学会研究大会ポスター作成のため	八雲町栄浜1遺跡「P-20」および「P-20の複製品写真 デジタルデータ2点	
2	北海道大学 高倉 純	第72回アメリカ考古学会大会での口頭発表	遠軽町奥白滝1遺跡出土石器 6点	
3	遠軽町長 北川健司	「日本の地質百選」解説書(仮称)への「白滝黒曜石」の資料掲載	遠軽町赤石山8号沢の露頭写真ほか デジタルデータ 9点	
4	長野県浅間縄文ミュージアム 館長 萩原 茂	博物館企画展「仮面の縄文」の参考パネルに利用	千歳市ママチ遺跡出土土面写真ほか 写真転載 3点	
5	株式会社ニューサイエンス社	月間考古学ジャーナル2007年5月臨時増刊号の表紙に使用	恵庭市柏木川4遺跡手形付土製品 写真デジタルデータ1点	
6	富永勝也	シンポジウム「縄文文化の成立-草創期から早期へ」の事例報告に使用	函館市中野A遺跡出土遺物ほか 写真デジタルデータ103点	
7	大学共同利用機関法人人間文化研究機構 国立歴史民俗博物館 館長 平川 南	企画展「弥生はいつから!?-年代研究の最前線-」の図録・パネル等展示関連印刷物に使用	北斗市茂別遺跡出土縄文土器 写真デジタルデータ8点	
8	高倉 純	研究論文(「古代文化」第58巻第4号)で使用するため	遠軽町奥白滝1遺跡出土資料	
9	株式会社至文堂 代表取締役 川上 潤	日本の美術495「縄文土器 草創期・早期」に参考資料として図版掲載のため	函館市中野B遺跡出土土器集合写真 写真複写版1点	
10	株式会社至文堂 代表取締役 川上 潤	日本の美術495「縄文土器 草創期・早期」に参考資料として図版掲載のため	函館市中野B遺跡遠景写真 写真複写版1点	
11	岩手県教育委員会 教育長	『平成19年度 北の縄文文化回廊展』に使用のため	白老町社台1遺跡赤彩壺出土状況写真ほか 写真デジタルデータ 14点	
12	市立函館博物館 館長 長谷部一弘	特別企画展『蘇る北の縄文ロード-発掘された縄文の世界-』に使用のため	千歳市美々4遺跡動物形土製品写真ほか 写真デジタルデータ 18点	
13	(南)あえるクリエイティブ 月刊rakra編集部 編集長 内澤稲子	「北東北の大人のためのエリアマガジンrakra」に使用のため	八雲町野田生1遺跡出土赤彩注口土器写真 写真デジタルデータ 1点	
14	株式会社 雄山閣 代表取締役 宮田哲男	『季刊考古学』第100号に使用のため	恵庭市柏木川4遺跡出土手形付・足形付土製品および出土土器写真 写真デジタルデータ 3点	
15	株式会社 山川出版社 編集長 齊藤幸雄	『日本史図録』(仮称)に使用のため	平取町ボロモイチャシ跡写真 写真デジタルデータ 1点	
16	西脇対名夫	任意団体会報記事(『北海道考古学会だより』第89号)の挿図として使用	千歳市キウス4遺跡出土石剣写真 写真撮影 2点	
17	北海道開拓記念館 館長 丹保憲仁	第63回特別展『鯨』展示パネルに使用のため	函館市桔梗2遺跡出土シャチ形土製品写真 写真デジタルデータ 1点	
18	オフィスJ・B 飯田幸夫	「CG日本史シリーズ 古代日本(仮題)」に使用のため	函館市中野B遺跡出土土器集合写真 写真デジタルデータ 1点	
19	有限会社コーベット・フォト エージェンシー 代表取締役 丹波万人	「新日本史総覧(仮称)」	遠軽町上白滝8遺跡出土細石刃写真 写真複写版 1点	
20	株式会社 至文堂 代表取締役 川上 潤	日本の美術498「縄文土器後期」に使用	八雲町野田生1遺跡出土赤彩土器写真 キウス4、5、7遺跡出土盛る器集合写真、炊く器集合写真 写真複写版 3点	
21	株式会社 至文堂 代表取締役 川上 潤	日本の美術498「縄文土器 後期」に使用	八雲町野田生1遺跡、小樽市忍路土場遺跡、千歳市キウス4・7遺跡出土土器写真ほか デジタルデータ12点	
22	札幌大学埋蔵文化財展示室 木村英明	NHK特別企画白滝遺跡群ジオパーク推進協議会の取り組み報道番組に使用のため	遠軽町上白滝2遺跡出土細石刃、細石刃核写真 写真転載 1点	
23	一戸町教育委員会 教育長 遠藤裕一	北の縄文文化回廊展示図録に使用のため	千歳市キウス4遺跡出土巻き貝形土器ほか 写真撮影 16点	
24	国際縄文学協会 西垣内賢佑	会報誌「縄文」16号に使用のため	恵庭市柏木川4遺跡出土 手形付・足形付土製品など集合写真 デジタルデータ1点	
25	恵庭市郷土資料館 館長 水高和彦	恵庭市郷土資料館常設展示入り口画像検索システム掲載画像に使用のため	恵庭市柏木川4遺跡出土 手形付・足形付土製品など デジタルデータ5点	
26	株式会社 至文堂 代表取締役 川上 潤	日本の美術499「縄文土器 晩期」に使用のため	恵庭市柏木川4遺跡出土 手形付・足形付土製品など集合写真 デジタルデータ2点	
27	北海道開拓記念館 館長 丹保憲仁	『北海道開拓記念館だより』Vol. 37 No. 2	千歳市美々4遺跡出土アンモナイト 写真撮影 1点	
28	株式会社同成社 代表取締役 山脇洋亮	『縄文時代の考古学 5巻』中村耕作「クッキー状・パン状食品」挿図に使用のため	小樽市忍路土場遺跡出土クッキー状・パン状炭化物 写真転載 1点	
29	千歳市長 山口幸太郎	『写真誌ちとせ』2008年度版に使用のため	千歳市美々4遺跡周提墓ほか 写真転載 3点	

番号	申請者	使用目的	利用資料名・点数	備考
30	株式会社河出書房 代表取締役 若森繁男	堤 隆編『考古学の世界 旧石器時代』に使用のため	遠軽町上白滝8遺跡出土接合資料写真ほか 写真複製版 15点	
31	日本考古学協会 代表理事 西谷 正	『日本考古学年報』59に使用のため	恵庭市柏木川4遺跡出土手形付・足形付土製品など資料写真 デジタルデータ 1点	
32	恵庭市郷土資料館長 水高和彦	恵庭市郷土資料館常設展示入り口画像検索システム掲載画像に使用のため	恵庭市ユカンボシE10遺跡調査状況写真ほか 写真転載3点 写真デジタルデータ5点	
33	江別市教育委員会 教育長 高橋 侃	江別市郷土資料館ロビー展に使用	江別市大麻1遺跡出土草創期土器写真 写真デジタルデータ1点	
34	白糠町教育委員会 教育長 板谷聖一	上茶路遺跡出土遺物の展示にかかわる解説パネルの制作	白糠町上茶路1遺跡調査区遠景写真ほか 写真複製版 10点	
35	指宿市考古博物館 時遊館COCCOはしむれ 館長 田中民也	平成19年度企画展示にパネルとして展示、企画展示図録に掲載	恵庭市柏木川4遺跡出土手形付・足形付土製品写真 K P 397出土遺物集合写真 K P 397遺物出土状況写真 計 写真デジタルデータ3点	
36	(株)小学館出版局歴史・美術 「日本の歴史」編集部 編集長 清水芳郎	『日本の歴史』第2巻「日本の原像」に使用	恵庭市ユカンボシE7遺跡 P-1遺物出土状況写真	
37	西脇対名夫	『知床の考古』（仮題）に使用	八雲町野田生1遺跡AH-11住居跡出土土器写真 写真デジタルデータ 1点	
38	東北歴史博物館 館長 進藤秋輝 北海道開拓記念館 館長 丹保憲仁 新潟県立歴史博物館 館長 中島太郎	特別展「古代北方世界に生きた人びとー交流と交易ー」において展示図録、パネル、広報など展示関連印刷物に使用のため	恵庭市西島松5遺跡出土大刀写真ほか 写真デジタルデータ 16点	
39	産経新聞大阪本社 編集局次長 安本寿久	産経新聞の連載「日本人解剖」に使用	苫別市滝里安井遺跡出土クマ形石製品写真 写真デジタルデータ 1点	
40	札幌市教育委員会指導室 指導担当係長 工藤真嗣	指導資料に使用	千歳市美々8遺跡出土フクロウ意匠のついた土器写真 写真転載 1点	
41	青森県環境生活部県民生活文化課 課長 中村満義	書籍に使用	千歳市オサツ2遺跡出土「大」刻書須恵器壺写真 1点 千歳市ユカンボシC15遺跡出土ヘラ記号・文様須恵器壺写真 2点 計 写真プリント 3点	
42	NPO法人NPクラスター 湧別川流域研究部会長 本吉春雄	シンポジウム資料に使用	遠軽町白滝遺跡群出土旧石器接合資料写真 写真転載 1点	
43	弥永北海道博物館	書籍に使用	今金町美利河2砂金採掘跡写真 写真デジタルデータ 3点	
44	岩宿博物館 館長 近藤秀樹	学習シート『岩宿人のくらしをさぐる』に使用のため	遠軽町赤石山黒曜石露頭写真 写真デジタルデータ 1点	
45	熊谷仁志	『知床の考古学』（仮題）に使用のため	千歳市美沢3遺跡出土土器写真ほか 写真デジタルデータ 13点	
46	根室歴史と自然の資料館 館長 佐藤達雄	根室市歴史と自然の資料館企画展示資料に使用のため	八雲町野田生1遺跡出土赤彩土器写真ほか 写真転載 4点	

### c 資料貸出承認一覧

番号	申請者	使用目的	貸出資料名および点数	備考
1	市立函館博物館 館長 長谷部一弘	平成19年度市立函館博物館特別企画展に展示のため	千歳市美々4遺跡出土動物形土製品（複製）ほか 26件65点	
2	岩手県教育委員会 教育長 相澤 徹	岩手県立博物館・御所野縄文博物館「北の縄文文化回廊展」展示資料のため	千歳市キウス4遺跡出土注口土器ほか 16点	
3	平取町教育委員会 教育長 斉藤憲章	平成19年度沙流川歴史館特別展「縄文土器のうつりかわり」展示のため	千歳市キウス4遺跡出土土器ほか 38点	
4	北海道開拓記念館	第148回テーマ展「まるごとアンモナイト」の展示資料として	千歳市美々4遺跡出土アンモナイト 1点	
5	東北歴史博物館 館長 進藤秋輝 北海道開拓記念館 館長 丹保憲仁 新潟県立歴史博物館 館長 中島太郎	特別展「古代北方世界に生きた人びとー交流と交易ー」において展示するため	恵庭市西島松5遺跡出土大刀 5点 蕨手刀 2点 擦土器（甕） 5点 千歳市オサツ2遺跡出土鉄製鎌 1点 計 4件13点	
6	九州国立博物館 館長 三輪嘉六	文化交流展示「海の道、アジアの路」に陳列のため	遠軽町奥白滝1遺跡細石刃核など 計14件	資料貸出し期間の更新
7	札幌市教育委員会 教育長 奥岡文夫	札幌市埋蔵文化財センター講演会「北の縄文文化と土偶」に併せて展示するため	北海道函館市著保内野遺跡出土国宝「土偶」複製	

(3) 講演会・報告会 (道民カレッジ連携講座)

a 『(財)北海道埋蔵文化財センター平成18年度発掘調査報告会』

[日 時] 平成19年4月14日(土) 13:30~16:30

[会 場] 2階研修室

[内 容] 平成18年度に財団法人北海道埋蔵文化財センターが調査を行った遺跡のうち、次の遺跡について、スライドを使用して発掘成果の報告を行った。また、成果展会場では、報告者による展示解説を行った。

- |               |      |
|---------------|------|
| (1) 恵庭市西島松2遺跡 | 土肥研晶 |
| (2) 恵庭市柏木川4遺跡 | 谷島由貴 |
| (3) 千歳市キウス5遺跡 | 広田良成 |
| (4) 千歳市梅川4遺跡  | 宗像公司 |
| (5) 江別市対雁2遺跡  | 酒井秀治 |
| (6) 白老町虎杖浜2遺跡 | 阿部明義 |
| (7) 遠軽町旧白滝5遺跡 | 坂本尚史 |
| (8) 釧路町天寧1遺跡  | 影浦 覚 |
| (9) 白糠町上茶路遺跡  | 立田 理 |

[参加者] 62名

[企 画] 財団法人北海道埋蔵文化財センター調査部

b 秋季講演会 『船の考古学』

[日 時] 平成19年11月10日(土) 13:30~15:30

[会 場] 2階研修室・展示室

[講 師] 国際日本文化研究センター教授 宇野隆夫氏

[内 容] 船の考古学の研究視点として、旧大陸文明と新大陸文明の大きな違いについて解説していただいた。また、舟・船の研究について世界の技術史、交流史(水運、陸運)、都市史の例を紹介していただいた。

[参加者] 69名

[企 画] 倉橋直孝

\*詳細は、講演会要旨を参照。

c 冬季講演会 『土の中から出てきたよーフォトグラファーからみた縄文世界ー』

[日 時] 平成20年1月26日(土) 13:30~15:30

[会 場] 2階研修室

[講 師] 写真家 小川忠博氏

[内 容] 国内各地で数多くの考古遺物を撮影している講師の、独自の撮影テクニックの紹介とともに、写真を通してみた縄文世界についてわかりやすく説明していただいた。約200枚の講師撮影の写真が紹介された。

[参加者] 47名

[企 画] 藤井 浩

\*詳細は、講演会要旨を参照。

(4) **考古学教室**（道民カレッジ連携講座）

**a 第1回 「ガラス玉づくり1」**

〔日 時〕 平成19年6月23日（土） 13：30～15：30

〔講 師〕 装飾タイル作家 宮崎幸子

〔参加者〕 15名

〔内 容〕 北海道の遺跡からは様々なガラス玉が出土します。ガラス玉の歴史を学ぶとともに、作り方についての説明と、実際にガラス玉づくりを体験した。

北海道内から出土するガラス玉がどのように作られていったのか、色の取り合わせがどのようになされるのかなどを解明するためには、製作技法を理解することが重要です。ガスバーナーと市販のガラス棒を使った方法で、実際に丸い玉を作って、整形の難しさ、大きな玉を作ることのむずかしさなどを体験した。

「ガラス玉づくり1」は制作経験のない方を対象とした。



ガラス玉づくり

**b 第2回 「ガラス玉づくり2」**

〔日 時〕 平成19年6月30日（土） 13：30～15：30

〔講 師〕 装飾タイル作家 宮崎幸子

〔参加者〕 12名

〔内 容〕 「ガラス玉づくり1」と同様。ただし、制作経験のある方を対象とした。

**c 第3回 「縄文ネックレスをつくってみよう」**

〔日 時〕 平成19年9月8日（土）  
13：30～15：30

〔講 師〕 財団法人北海道埋蔵文化財センター 普及活用課主任  
藤井 浩

〔参加者〕 23名

〔内 容〕 昨年までの「勾玉づくり」講座の内容を発展させたもので、滑石の勾玉だけでなく、素材にコハクを加え、いろいろな形の玉づくりにも挑戦した。



縄文ネックレスをつくってみよう

**d 第4回 「石器づくり」**

[日 時] 平成19年11月3日(土) 13:30~15:30

[講 師] 財団法人北海道埋蔵文化財センター 主任 直江康雄

[参加者] 12名

[内 容] 旧石器時代の石器の作り方を実際に体験し、石や鹿の角を使って黒曜石の原石を打ち欠いて石器製作技法に触れることを目的とした。



石器づくり

今年度は、基本的な石の割れ方や人類の石器使用の歴史などの解説の後、旧石器時代の細石刃技法による石器製作の実際を体験した。細石刃の取得後に、用意

した木製の柄に装着しペーパーナイフ製作を予定していたが、時間の都合から、各自持ち帰りの上、作製して頂くこととした。意図した打点に的確に合うことや力の入れ具合など、苦勞される様子がみられ、旧石器時代人の特化した技術に触れて頂いた。

**e 第5回 「考古学入門講座」**

[日 時] 平成19年12月15日(土) 13:30~15:30

[講 師] 財団法人北海道埋蔵文化財センター 普及活用課課長 村田 大

[参加者] 47名

[内 容] 「考古学」とはどのような学問なのかを、わかりやすく解説することを目的とした入門講座です。今回は一般になじみがないが、考古学研究の基礎資料である「発掘調査報告書」の内容を解説した。また、報告書等から遺跡を調べ、現地へ行ってみる方法などを紹介しました。

**f 第6回 「拓本講座」**

[日 時] 平成20年3月22日(土) 13:30~15:30

[講 師] 財団法人北海道埋蔵文化財センター 普及活用課主任 藤井 浩

[参加者] 27名

[内 容] 墨と画仙紙を使って土器の文様を写しとる「拓本」の講座です。縄文早期から擦文土器まで、様々な時期の土器にも挑戦していただいた。

## (5) 考古学教室出前講座

### a 事業目的

完全学校週5日制に対応し、土曜日や日曜日の休日に、市町村教育委員会との連携の下で、子供たちにとってわかりやすく地域の歴史や文化を説明するとともに、それらを大切にすることを養い、体験学習を通じて豊かな人間性や多様な個性を育むことを目的とする。

これまで、道立センター内で行ってきた考古学教室を、全道の市町村に出向いて地元教育委員会と連携を図って実施することにより、市町村独自事業実施の契機となるよう努める。

### b 事業内容

#### (1) 地域の遺跡を学ぶ - 実物にふれてみよう - (40分程度)

地元市町村出土の遺物や北海道立埋蔵文化財センター保管の土器・石器類に実際に触れてもらいながら、地元市町村の埋蔵文化財についての説明を行う。あわせて、埋蔵文化財紹介のビデオ『遺跡ってなーに』を鑑賞する。

#### (2) 体験学習 - 勾玉づくり - (2時間程度)

子供たちの歴史・文化に対する関心をより高めるために、縄文時代等にアクセサリーとして使用されていた「勾玉」を、滑石を材料に紙ヤスリなどで実際に製作する。また、時間の許す限り、石器(黒曜石破片)での紙切り、火おこしなどの体験学習を行う。

### c 実施報告

今回7か所の実施市町村では、社会教育事業として6か所、学校教育の体験学習として1か所で実施した。実施時期は募集時期の兼ね合いもあり、7月・9月が多い。

最近では、出前講座が社会教育関連事業として位置付けられることが多く、市町村関係者への普及という本来の趣旨が理解されていないことが多くなりつつある。募集時の説明、案内などを改善する必要があると感じている。

なお、旅費の負担等が問題となるが、市町村教育委員会等の依頼があれば「出前講座」を実施している。今年度は2か所について実施した。

### d 実施市町村一覧

(「考古学教室出前講座」事業分)

	市町村名	実施場所	実施日	参加人数	担当	備考
1	苫前町	苫前町考古資料館	平成19年6月16日(土)	17名	村田・藤井	とままえふるさと塾 とままえのむかし発見
2	北見市	瑞穂小中学校	平成19年7月3日(火)	35名	村田・倉橋	学校授業 小中学生および教職員
3	白老町	虎杖浜2遺跡プレハブ	平成19年7月14日(土)	55名	村田・倉橋	白老町「歴史と文化のまちPR体験学習」
4	長沼町	役場3F会議室	平成19年9月2日(日)	17名	倉橋・藤井	長沼町リーダー研修会
5	共和町	共和町かかし古里館	平成19年9月15日(土)	30名	倉橋・藤井	共和町かかし古里館 土曜日講座
6	利尻町	利尻交流促進施設どんと	平成19年9月22日(土)	21名	倉橋・藤井	利尻町発掘探検隊講座
7	白糠町	社会福祉センター	平成19年12月22日(土)	15名	村田・藤井	ふるさと未来塾 第4回

(「考古学教室出前講座」依頼分)

	市町村名	実施場所	実施日	参加人数	担当	備考
1	北広島市	北広島市中央公民館	平成19年7月8日(日)	180名	藤井	第8回ワクワク公民館こどもまつり
2	北広島市	広葉中学校	平成19年12月12日(水)	40名	藤井	2年生社会科選択授業

## (6) こども考古学教室

### a 「夏休み親子考古学教室」第1回・第2回

[期 日] 第1回 平成19年7月28日(土)

第2回 平成19年8月11日(土)

[参加者] 第1回 28名

第2回 17名

[内 容] 火おこし体験と勾玉づくりを中心にした、小中学生の親子向けの考古学入門講座です。

- ・ビデオによる入門講座・火おこし体験・勾玉づくり・展示室体験クイズラリー

[企 画] 藤井 浩



夏休み親子考古学教室

### b 写生会「ビビちゃんと描く縄文の世界」

[期 日] 平成19年8月4日(土)

[目 的] 埋蔵文化財センターにある遺物や展示物などを写生することで、埋蔵文化財と深く触れあう機会を提供し、埋蔵文化財保護への理解を深めてもらう。

[参加者] 14名

[内 容] 絵の道具(水彩絵の具・クレヨン・鉛筆など)を持参してもらい、当方で用意した画用紙に埋蔵文化財センターにある土器・石器等の遺物、展示物を題材に写生会を実施した。提出された作品はセンター職員による審査を行い、入賞者に賞状と賞品を授与した。審査方法は「埋蔵文化財というテーマに沿っているか、その理解力は、そして夢があるか」などを考慮して、職員の採点投票によった。作品は当センターにて、長期にわたり展示させていただいた。

[企 画] 藤井 浩



写生会の参加者



写生会の受賞者

**c 「冬休み縄文生活体験ひろば」**

[期 日] 平成20年1月4日(金)～1月13日(日)

[目 的] 体験学習を中心にした考古学入門講座を通して、埋蔵文化財への関心を高めることを目的とした。

[内 容] 展示室の遺物を手本にして、大昔の道具の復元や生活の体験を行う。

- ・ミニチュア土器をつくろう
- ・縄文時代の土製品(耳飾り・土偶・仮面など)をつくろう
- ・ミニチュア勾玉をつくろう
- ・火おこしに挑戦しよう
- ・小さな小さな発掘体験



冬休み縄文生活体験ひろば

[企 画] 藤井 浩

**d 「冬休み親子考古学教室」第1回・第2回**

[期 日] 第1回 平成20年1月5日(土)

第2回 平成20年1月19日(土)

[参加者] 第1回 40名

第2回 11名

[内 容] 勾玉づくりと展示室体験を中心にした、小中学生向けの考古学入門講座。

- ・ビデオによる入門講座・おこし体験・勾玉づくり・展示室体験クイズラリー



展示室体験クイズラリー

[企 画] 藤井 浩

**e 冬休み親子写真撮影会「フクロウ博士のフォトコンテスト」**

[期 日] 平成20年1月12日(土)

[目 的] 親子で埋蔵文化財センターにある遺物や展示物などを写真に撮影することで、埋蔵文化財と深く触れあう機会を提供し、埋蔵文化財保護への理解を深めてもらうことを目的とした。作品は当センターにて展示させていただいた。



撮影会の参加者

[参加者] 9名

[企 画] 藤井 浩

(7) 研修

- [名 称] 平成19年度埋蔵文化財担当職員研修会「土器分類の実際8」
- [目 的] 発掘調査に携わる市町村職員等を対象に、土器の分類についての専門的な研修を行い、今後の調査、普及啓発活動に寄与することを目的とする。
- [講 師] 大沼忠春氏（北海道教育庁文化・スポーツ課主任）
- [日 時] 平成20年2月8日（金） 10：30～16：30  
 （日程） 10：00 受付開始  
 10：30 主催者挨拶 第1調査部長 越田賢一郎  
 10：40～12：00 研修1 「擦文時代土器研究史（前期）」  
 13：00～16：30 研修2 「北海道における擦文時代土器の編年（前期）」
- [会 場] 2階研修室
- [内 容] 昨年度の続縄文文化後半期に関する研修に引き続き、今年度は擦文時代前期の土器分類に関する基礎知識について研修を行った。  
 講師による擦文時代土器研究史の説明、関連する本州の土器編年の概要説明、北海道における擦文時代前期のポイントとなる遺跡と出土土器の概要説明が主な内容である。
- [参加者] 市町村職員等 26名 北海道埋蔵文化財センター職員 25名

「研修会参加者名簿」（財団センター職員は除く）

	名 前	所 属		名 前	所 属
1	長 町 章 弘	恵庭市郷土資料館	14	松 田 功	知床博物館
2	豊 田 宏 良	千歳市埋蔵文化財センター	15	門 間 勇	斜里町埋蔵文化財センター
3	松 田 淳 子	千歳市埋蔵文化財センター	16	高 岡 由 香	斜里町埋蔵文化財センター
4	石 神 敏	小樽市教育委員会	17	赤 石 慎 三	苫小牧市博物館
5	三 浦 孝 一	八雲町教育委員会	18	菅 野 修 広	登別市教育委員会
6	柴 田 信 一	八雲町教育委員会	19	川内谷 修	日高町立門別図書館郷土資料館
7	佐 橋 赴 未	八雲町教育委員会	20	長 田 佳 宏	平取町二風谷アイヌ文化博物館
8	山 田 央	七飯町歴史館	21	熊 崎 農夫博	厚岸町海事記念館
9	斉 藤 邦 典	上ノ国町教育委員会	22	高 橋 和 樹	北海道教育庁文化・スポーツ課
10	塚 田 直 哉	上ノ国町教育委員会	23	中 田 裕 香	北海道教育庁文化・スポーツ課
11	澤 田 健	富良野市博物館	24	藤 原 秀 樹	北海道教育庁文化・スポーツ課
12	高 畠 孝 宗	オホーツクミュージアムえさし	25	種 市 幸 生	北海道教育庁文化・スポーツ課
13	小 野 基	美幌博物館	26	田 才 雅 彦	北海道教育庁文化・スポーツ課



会場の様子



講師：大沼忠春氏

## 7 利用者状況など

今年度のセンター利用者は、前年度に比べ1,400人弱の増加となった。これは、おもにゴールデンウィーク期間中に周辺施設（北海道開拓記念館、北海道開拓の村、自然ふれあい交流館）と連携して行った「歴史発見！自然発見！ウォークラリー2007」と夏休み・冬休み期間中の児童・生徒向け体験型の展示開催による効果と判断される。また、小学校と大学の団体施設見学が増加している。

### (1) 入館者一覧

#### 月別入館者数一覧

月	開館日数	大人(男性)	大人(女性)	子供	合計
平成19年 4月	25	415	179	75	669
平成19年 5月	27	456	359	413	1228
平成19年 6月	26	434	355	310	1099
平成19年 7月	26	566	400	459	1425
平成19年 8月	27	470	514	533	1517
平成19年 9月	25	375	312	220	907
平成19年10月	26	441	350	148	939
平成19年11月	24	334	264	29	627
平成19年12月	19	323	203	10	536
平成20年 1月	24	279	216	138	633
平成20年 2月	25	222	95	12	329
平成20年 3月	25	295	191	42	528
合計	299	4610	3438	2389	10437

#### 暦年入館者数一覧

月	11年度	12年度	13年度	14年度	15年度	16年度	17年度	18年度	19年度	合計
4月		758	656	545	538	831	595	830	669	5422
5月		709	453	656	1081	964	716	1440	1228	7247
6月		652	621	808	1299	1054	858	768	1099	7159
7月		527	303	633	922	828	1124	1138	1425	6900
8月		673	388	662	789	747	851	1238	1517	6865
9月		544	374	631	762	1020	727	790	907	5755
10月			650	302	649	991	1027	773	945	6276
11月	1988	467	659	445	836	669	618	669	627	6978
12月	687	286	326	669	505	330	318	232	536	3889
1月	593	218	411	287	229	189	240	462	633	3262
2月	366	129	240	212	270	187	189	226	329	2148
3月	469	221	362	297	331	296	366	329	528	3199
合計	4103	5834	5095	6494	8553	8142	7375	9067	10437	65100

は最多（平成11年度除く）



子供会体験学習（勾玉づくり）

### 特別展示期間中の入館者

展 示 タ イ ト ル	入館者数	期 間
「(財)北海道埋蔵文化財センター平成18年度発掘調査成果展」	2260名	平成19年3月27日～6月10日
「わかる考古学1－縄文生活ひろば－」展	2734名	平成19年7月7日～8月26日
「交流の考古学3－船－」展	1554名	平成19年9月29日～11月18日
「わかる考古学2－北海道遺跡百選－」展	967名	平成20年1月5日～3月2日

### 報告会・講演会参加者

事 業 名	実 施 日	参 加 者
(財)北海道埋蔵文化財センター平成18年度発掘調査報告会	平成19年4月14日	62名
秋季講演会「船の考古学」	平成19年11月10日	69名
冬季講演会「土の中から出てきたよ」	平成20年1月26日	47名

### 考古学教室参加者

事 業 名	実 施 日	参 加 者
ガラス玉づくり1	平成19年6月23日	15名
ガラス玉づくり2	平成19年6月30日	12名
縄文ネックレスをつくってみよう	平成19年9月8日	23名
石器づくり	平成19年11月3日	12名
考古学入門講座	平成19年12月15日	47名
拓本講座	平成19年3月22日	27名
こども考古学教室 夏休み親子考古学教室 第1回	平成19年7月28日	28名
こども考古学教室 夏休み親子考古学教室 第2回	平成19年8月11日	17名
こども考古学教室 冬休み親子考古学教室 第1回	平成20年1月5日	40名
こども考古学教室 冬休み親子考古学教室 第2回	平成20年1月19日	11名

### 考古学教室出前講座

事 業 名	実 施 日	参 加 者
考古学教室出前講座（苫前町）	平成19年6月16日	17名
考古学教室出前講座（北見市）	平成19年7月3日	35名
考古学教室出前講座（白老町）	平成19年7月14日	55名
考古学教室出前講座（長沼町）	平成19年9月2日	17名
考古学教室出前講座（共和町）	平成19年9月15日	30名
考古学教室出前講座（利尻町）	平成19年9月22日	21名
考古学教室出前講座（白糠町）	平成19年12月22日	15名

### 考古学教室出前講座（依頼分）

事 業 名	実 施 日	参 加 者
第9回ワクワク公民館こどもまつり（北広島市）	平成19年7月8日	180名
広葉中学校（北広島市）	平成19年12月12日	40名

## (2) 団体利用者対応

小学校・教育機関等の団体・その他の団体を対象に勾玉づくり等の体験学習を18回行った。大学を対象に学外講義を3回行った。石狩教育局を対象に所外研修を1回行った。

### [小学校]

平成19年5月8日(火)	江別市立文京台小学校3年生拓本体験学習	26名
6月14日(木)	江別市立上江別小学校施設見学	180名
7月24日(火)	南幌町立みどり野小学校体験学習	73名



南幌町立みどり野小学校体験学習

9月12日(水)	江別市立東野幌小学校施設見学	105名
9月29日(土)	江別市立野幌・豊幌・文京台小第三小地域間交流事業体験学習	72名
10月3日(木)	札幌市立北陽小学校体験学習	71名

### [中学校]

平成19年5月16日(水)	仁木町立銀山中学校勾玉づくり体験学習	15名
---------------	--------------------	-----

### [大学]

平成19年4月18日(水)	札幌学院大学講義施設見学	56名
4月24日(火)	札幌学院大学学外授業	12名
5月17日(木)	北翔大学今井ゼミ施設見学	5名
5月25日(金)	札幌大学川名ゼミ施設見学	4名
6月2日(土)	北翔大学菊地ゼミ学外授業	12名
8月3日(金)	北翔大学スポル体験学習	16名
9月28日(金)	名古屋大学考古学研究室施設見学	9名
10月4日(木)	石狩教育局初任者研修所外研修	20名
10月6日(土)	札幌大学本田ゼミ施設見学	7名



北翔大学学外施設研修

10月16日 (火)	札幌学院大学「考古学研究法」施設見学	24名
10月25日 (木)	北翔大学学外施設研修	27名
10月31日 (水)	札幌大学木村ゼミ体験学習	35名
10月31日 (水)	札幌大学川上ゼミ施設見学	9名
11月1日 (木)	北翔大学施設見学	25名
12月1日 (土)	北翔大学菊地ゼミ学外授業	53名
12月3日 (月)	北翔大学三野ゼミ施設見学	33名
12月15日 (土)	北翔大学三野ゼミ施設見学	6名
[教育機関等の団体]		
平成19年 5月16日 (水)	のっぽろ幼稚園研修係勾玉づくり体験	4名
5月31日 (木)	フリースクール札幌自由が丘学園勾玉づくり体験学習	17名
8月2日 (木)	北海道民間教育研究団体連絡協議会施設見学体験学習	12名
8月10日 (金)	千歳市教育委員会体験学習	16名
10月27日 (土)	仙台藩白老元陣屋資料館施設見学	6名
12月16日 (日)	韓国ウリ文化財研究院施設見学	39名
[その他の団体]		
平成19年 5月20日 (日)	すずらん会勾玉づくり体験	7名
6月2日 (土)	森の子児童センター施設見学	10名
6月13日 (水)	名古屋古代を訪ねる会	32名
6月22日 (金)	福岡県筑紫古代文化研究会	13名
7月7日 (土)	札幌市老人福祉センター施設見学	18名
7月12日 (木)	岩見沢幌向第15町内会女性部施設見学	37名
7月14日 (土)	森の子児童センター体験学習	17名
7月18日 (水)	NHK文化センター新さっぽろ教室施設見学	17名
7月22日 (日)	手稲1万歩歩く会	87名
7月24日 (火)	森の子児童センター体験学習	15名
7月27日 (金)	大麻西小ミニ児童館体験学習	20名
7月27日 (金)	森の子児童センター体験学習	17名
7月29日 (日)	森の子児童センター体験学習	17名
8月1日 (水)	医療法人健康会おおあさクリニック施設見学	18名
8月9日 (木)	手稲山口ひばり子供会体験学習	38名
8月11日 (土)	デイサービスセンター友愛野幌施設見学	24名
8月14日 (火)	デイサービスセンターぶらいむ施設見学	12名
9月30日 (日)	室蘭商工会議所第3ブロック施設見学	26名
10月19日 (金)	ベストフレンズ(江別児童会)体験学習	37名
10月20日 (土)	白石かがやき園施設見学	7名
10月24日 (水)	茶話ホンポ施設見学	6名
平成20年 1月29日 (火)	デイサービスセンターぶらいむ施設見学	13名
3月19日 (水)	おおあさクリニック施設見学	19名
3月21日 (金)	おおあさクリニック施設見学	19名

### (3) 購入図書一覧

	書名	編著者名	出版社名
1	桜Ⅰ（ものと人間の文化史137-I）	有岡利行	法政大学出版局
2	桜Ⅱ（ものと人間の文化史137-II）	有岡利行	法政大学出版局
3	麴（こうじ）（ものと人間の文化史138）	一鳥英治	法政大学出版局
4	河岸（かし）（ものと人間の文化史139）	川名 登	法政大学出版局
5	神饌（しんせん）神と人の饗宴（ものと人間の文化史140）	岩井宏實	法政大学出版局
6	東アジア考古学辞典	西谷 正	東京堂出版
7	旧石器考古学辞典 3訂版	旧石器文化談話会	学生社
8	マンモスを科学する（角川学芸ブックス）	鈴木直樹	角川学芸出版
9	北海道の湿原	辻井達一ほか	北海道新聞社
10	改訂版 太古の北海道 化石博物館の楽しみ	木村方一	北海道新聞社
11	考古学 -理論・方法・実践-	コリン・レンフルーほか	東洋書林
12	考古学の基礎知識（角川選書409）	広瀬和雄	角川学芸出版
13	シルクロードのガラス -時空を超えた魅惑の輝き-	平山郁夫シルクロード美術館ほか	山川出版社
14	トンボ玉	木暮紀一	ほるぷ出版
15	ジュニア日本の歴史辞典	歴史教育者協議会	岩崎書店
16	アニマルトラック&バードトラックハンドブック 野山で見つけよう動物の足跡 改訂増補版	今泉忠明	自由国民社
17	樹皮ハンドブック	林 将之	文一総合出版
18	野をわたる風にのる 植物のたび	アンネ・メッラー	岩波書店
19	どんぐり見聞録	いわさゆうこ	山と溪谷社
20	タカラガイ・ブック 日本のタカラガイ図鑑	池田 等ほか	東京書籍
21	雑穀を旅する スローフードの原点	増田昭子	吉川弘文館
22	海辺の石ころ図鑑	渡辺一夫	ポプラ社
23	しらべる力をそだてる授業！	赤木かん子、塩谷京子	ポプラ社
24	衣食住の歴史 ポブラディア情報館	西本豊弘	ポプラ社
25	日本地理 ポブラディア情報館	西本豊弘	ポプラ社
26	どんぐりの穴のひみつ（わたしの研究11）	高柳芳恵ほか	偕成社
27	野鳥と木の実ハンドブック	叶内拓哉	文一総合出版
28	狩猟と供儀の文化誌	中村生雄ほか	森話社
29	日本人になった祖先たち DNAから解明するその多元的構造	篠田謙一	日本放送出版協会
30	近現代考古学の射程 今なぜ近現代を語るのか	メタ・アーケオロジー研究会	六一書房
31	城のつくり方図典	三浦正幸	小学館
32	理系の視点からみた「考古学」の論争点	新井 宏	大和書房
33	楽しい考古学 遺跡の中で見る夢	石野博信	大和書房
34	語りかける縄文人		新泉社
35	都市と都城（市民の考古学2）	藤本 強	同成社
36	アイヌ民族の歴史	榎森 進	草風館
37	新装ワイド版 自然景観の読み方 山を読む	小疇 尚	岩波書店
38	新装ワイド版 自然景観の読み方 森を読む	大場秀章	岩波書店
39	新装ワイド版 自然景観の読み方 日本列島の生き立ちを読む	斎藤靖二	岩波書店
40	新装ワイド版 自然景観の読み方 風と雲を読む	中村和郎	岩波書店
41	新装ワイド版 自然景観の読み方 地図を読む	五百沢 智也	岩波書店
42	考古学・人類学・言語学との対話 日本語はどこから来たのか	大野晋、金関恕、馬場悠男ほか	岩波書店
43	考古学入門（「知」のビジュアル百科35）	ジェーン・マッキントッシュほか	あすなろ書房
44	縄文の音 増補新版	土取利行	青土社

	書名	編著者名	出版社名
45	誰でも読める 日本中世史年表	吉川弘文館編集部	吉川弘文館
46	よみがえる日本の古代 旧石器~奈良時代の日本がわかる復元古代史	早川和子	小学館
47	図説人口で見る日本史 縄文時代から近未来社会まで	鬼頭 宏	PHP研究所
48	日本考古学の原点・大森貝塚(シリーズ「遺跡を学ぶ」31)	加藤 緑	新泉社
49	新版 魚の分類の図鑑 世界の魚の種類を考える	上野輝彌、坂本一男	東海大学出版会
50	アイヌ葬送墓集成図	宇田川 洋	北海道出版企画センター
51	江戸明治の百名山を行く - 登山の先駆者松浦武四郎	渡辺 隆	北海道出版企画センター
52	ハウカセの大きな石 - えぞ地1670年代と北海道2000年代初期のささやかな年代史-	不破俊輔	北海道出版企画センター
53	移住とフォークロア - 北海道の生活文化研究-	氏家 等	北海道出版企画センター
54	極東ロシアの先史文化と北海道 紀元前1千年紀の考古学	福田正宏	北海道出版企画センター
55	事典古代の発明	ピーター・ジェームズ/ニック・ソープ	東洋書林
56	日本の歴史 ビジュアル ニューワイドずかん百科		学研
57	先住民の現在 上 (図説人類の歴史9)	ヨラン・ブレンフルト	朝倉書店
58	先住民の現在 上 (図説人類の歴史9)	ヨラン・ブレンフルト	朝倉書店
59	函館と北海道の開拓都市 (日本の美術475号)	長尾 充	至文堂
60	正倉院宝物の装飾技法 (日本の美術486号)	西川明彦	至文堂
61	出土建築部材が解く古代建築 (日本の美術490号)	宮本長二郎	至文堂
62	文化財と科学技術 - 東京文化財研究所のしごと- (日本の美術492号)	鈴木規夫	至文堂
63	縄文土器 前期 (日本の美術496号)	建石 徹	至文堂
64	縄文土器 中期 (日本の美術497号)	土肥 孝	至文堂
65	列島史の南と北 (近世地域史フォーラム 第1巻)	菊池勇夫、真栄平房昭	吉川弘文館
66	地域史の視点 (近世地域史フォーラム 第2巻)	藪田 貫、奥村 弘	吉川弘文館
67	地域社会とリーダーたち (近世地域史フォーラム 第3巻)	平川 新、谷山正道	吉川弘文館
68	私たちの文化財を救え!! 災害と向きあう	文化財保存修復学会	クバプロ
69	まいごのびーちゃん(きゅーはくの絵本1 花鳥文様)	九州国立博物館	フレーベル館
70	じろじろぞろぞろ(きゅーはくの絵本2 南蛮屏風)	九州国立博物館	フレーベル館
71	先住民族アイヌ	多原香里	にんげん出版
72	原始・古代日本の祭祀	杉山林継、山岸良二	同成社
73	旧石器時代の日本列島と世界	小野 昭	同成社
74	発掘された日本列島2007 新発見考古速報	文化庁	朝日新聞社
75	近世・近現代考古学入門	鈴木公雄ゼミナール	慶應義塾大学出版会
76	図解日本地形用語事典 増訂版	日下 哉	東洋書店
77	日本の諸地域を調べる	上野和彦、高橋日出男	古今書院
78	足の人類学 足跡の考古学 弥生・古墳時代の家族	坂田邦洋	岩田書院
79	地球図説アースサイエンス	産業技術総合研究所地質標本館	誠文堂新光社

(4) 刊行物受領先一覧(\*国等の期間以外の掲載順は、基本的に所在地の市町村コード順とした。)

[国等の機関]

- 1 国立歴史民俗博物館
- 2 国立教育政策研究所社会教育実践研究センター
- 3 九州国立博物館

[北海道]

- 4 北海道立アイヌ民族文化研究センター
- 5 (財)アイヌ文化振興・研究推進機構
- 6 札幌市博物館活動センター
- 7 財団法人北海道文学館
- 8 北海道大学大学院文学研究科
- 9 北海道大学総合博物館
- 10 札幌大学 ペリフェリア・文化学研究所
- 11 暮らしの新聞社
- 12 函館市教育委員会 生涯学習部文化財課
- 13 北海道立図書館
- 14 江別市教育委員会生涯学習課
- 15 江別土器の会
- 16 北翔大学生涯学習研究所
- 17 三笠市立博物館
- 18 恵庭市郷土資料館
- 19 噴火湾考古学研究会
- 20 北海道立森少年自然の家 ネイパル森
- 21 美幌博物館
- 22 平取町立二風谷アイヌ文化博物館
- 23 沙流川歴史館
- 24 上士幌町ひがし大雪博物館
- 25 浦幌町立博物館

[東北]

- 26 有限会社あえるクリエイティブ rakra 編集部
- 27 岩手県教育委員会
- 28 一戸町教育委員会
- 29 東北歴史博物館
- 30 秋田県立博物館
- 31 福島県教育委員会
- 32 会津若松市教育委員会文化課文化財グループ

[関東]

- 33 ひたちなか市教育委員会
- 34 足利市教育委員会
- 35 高崎市教育委員会 文化財保護課
- 36 所沢市立埋蔵文化財調査センター
- 37 鳩山町教育委員会分室 文化財保護・町史担当
- 38 市原市埋蔵文化財調査センター
- 39 (財)千葉県教育振興財団
- 40 明治大学文学部共同研究室 駿台史学会
- 41 株式会社 山川出版社
- 42 株式会社 文化環境研究所
- 43 国際縄文学協会
- 44 東京都港区教育委員会
- 45 東京都港区立港郷土資料館
- 46 株式会社 至文堂
- 47 財団法人文化財虫害研究所
- 48 駒澤大学禅文化歴史博物館
- 49 國學院大学大學考古學會
- 50 地域文化デジタル化推進協議会
- 51 国際基督教大学博物館 湯浅八郎記念館
- 52 神奈川県教育委員会教育局生涯学習文化財課
- 53 専修大学考古学会
- 54 敬和学園大学 人文社会科学研究所

[中部]

- 55 富山県埋蔵文化財センター
- 56 財団法人石川県埋蔵文化財センター
- 57 金沢学院大学
- 58 野々市町教育委員会文化振興課
- 59 福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館
- 60 山梨県埋蔵文化財センター
- 61 南アルプス市教育委員会 文化財課
- 62 北杜市教育委員会
- 63 甲斐市教育委員会
- 64 身延町教育委員会
- 65 長野市教育委員会 文化財課埋蔵文化財センター

- 66 岐阜女子大学文化情報研究センター
- 67 養老町教育委員会
- 68 伊東市文化財管理センター
- 69 磐田市教育委員会文化財課
- 70 一宮市博物館
- 71 安城市埋蔵文化財センター
- 72 小坂井町教育委員会

[近畿]

- 73 滋賀県教育委員会文化財保護課
- 74 栗東市出土文化財センター
- 75 野洲市教育委員会
- 76 竜王町教育委員会
- 77 愛荘町立歴史文化博物館
- 78 京都府教育庁指導部文化財保護課
- 79 南丹市立文化博物館
- 80 堺市教育委員会
- 81 岸和田市教育委員会
- 82 財団法人大阪府文化財センター
- 83 東大阪市立埋蔵文化財センター 発掘ふれあい館
- 84 大阪狭山市教育委員会
- 85 兵庫陶芸美術館
- 86 たつの市立埋蔵文化財センター
- 87 那珂ふれあい館

[中国]

- 88 鳥取県埋蔵文化財センター
- 89 島根大学ミュージアム
- 90 島根県埋蔵文化財調査センター
- 91 島根県古代文化センター
- 92 岡山県立博物館
- 93 株式会社 吉備人出版
- 94 広島県教育委員会
- 95 財団法人 広島県教育事業団埋蔵文化財調査室
- 96 広島県立歴史博物館
- 97 三次旧石器文化研究会

[四国]

- 98 香川県埋蔵文化財センター
- 99 愛媛大学埋蔵文化財調査室
- 100 高知市教育委員会
- 101 高知県教育委員会文化財課

[九州]

- 102 福津市教育委員会
- 103 松浦市教育委員会
- 104 熊本県文化財資料室
- 105 山鹿市教育委員会 文化課文化財係
- 106 相良村教育委員会
- 107 宮崎県教育委員会 文化財課
- 108 鹿児島国際大学 国際文化学部 博物館  
館実習施設考古学ミュージアム
- 109 指宿市教育委員会
- 110 鹿児島県立埋蔵文化財センター

## 8 講演会要旨

### (1) 秋季講演会

『船の考古学』

講師：宇野隆夫氏(国際日本文化研究センター教授)

#### はじめに

皆さん、こんにちは。只今ご紹介いただきました京都にある国際日本文化研究センターに所属しています宇野と申します。本日は、これから1時間半から2時間ほど、お付き合いいただきたいと思います。よろしくお願ひいたします。



先ほど、ご紹介いただきましたように、北海道立埋蔵文化財センターは、1999年に設立されております。私も、同じ年に現職に就いております。それから8年余りたつわけですが、その間に私が目標にしてきたことが、2つございます。ひとつは、今まで研究してきた地域の歴史、地域史を、世界史の枠組みの中で考え直してみたいということでもあります。もうひとつは、考古学の世界をもう少し近代化したい、デジタル化や具体的にはGISを利用した研究をしようということなのです。本日は、その前半のお話をさせていただきます。

私が若い時から関心をもっておりましたものは、交流の歴史です。人と人、社会と社会がどのように関連をもっているのかということでございます。交流とは、交易のように両方が得をする場合もあり、その反対は戦争ということになります。他者との関係はいろいろあり、いろいろな道筋から考えていくこととなります。船は、交流の歴史からみますと非常に大切なものであり、そのなかで商船は、交易に深く関わり、軍船は戦争に深く関わっています。交流の中で、両極端のものがあり、関心をもって調べてきたところです。世界の船の歴史から、東洋の船の歴史、日本、北海道の船の歴史をどう捉えることができるかという問題は、私の最大の関心でありました。まず船の考古学を研究していく上で大切な、世界的な研究史を概観することとします。

#### 人類史と交流の歴史

旧大陸の文明と新大陸の文明には、大きな違いがございます。新大陸とは、南北アメリカ、オーストラリアなどがあたります。

今のところ、大航海時代以前において、新大陸では車輪や大型船をつかった形跡がありません。新大陸のマヤ文明やアンデス文明では、石器文化のなかで文明

が発展していました。それが大きな特徴といえます。それに対して、旧大陸の文明では、金属器、車輪、大型船の発達が必要な役割を果たしています。旧大陸、とりわけユーラシア大陸の歴史を考えるうえで、大型船や車などの交通手段をつかった遠隔地間交流がさかんであったことが、特に重要な位置を占めていると考えております。

舟・船の研究は、造船技術史でもありますし、陸運、水運を含めた交流の歴史でもあり、それを考えていく上で一番手がかりとなるのは、交通に関わる都市の歴史であるということになります。

陸運と水運については、歴史的な役割に大きな違いがあると考えております。人類の初期の段階では、海辺の水運が必要な役割を果たしたと考えられます。そして古代国家形成期に陸運が次第にウエートを高めてきます。それが中世、近世になると、再び水運が再発展し、近代国家が形成されてくるようになります。また、陸運が重視されるようになります。

それらの状況を生み出す背景として、先ほど申しました交流の両極として、交易と戦争があり、その社会が何をめざしたかが水陸運の変遷を形成したのではないかと考えております。交易では水運が有利であり、強い権力を作るには陸運が重要なのです。ユーラシア大陸の海辺に沿った地域に対して、内陸部にあたる場所では、地理的環境により、独自の文化・社会が育ったと考えております。ユーラシアの最も大きな地理的境界となっている地域は、タクラマカン砂漠、ヒマラヤ山脈、ならびにチベット高原地帯です。この地域が特に大きな境界であり、北アジア、東アジア、南アジア、中央アジア・西アジアの独自の文化・社会が形成されました。そしてそれらの交流により、交流拠点都市(ハブ都市)が生まれていきます。



図1 ユーラシアのシルクロード・ネットワーク

図1は、陸のシルクロード、草原のシルクロード、海のシルクロードを表したものです。これらの道がユーラシアをつないで、交流の重要な役割を担ってきました。その中で、今日は、海のシルクロードについてお話ししていきます。

人類の初期の段階に、川や海のある地域においては、水運を利用した活発な交流が行われていました。そのためどのような舟が使われていたかということにつ

いて、少しお話ししたいと思います。

### 旧石器時代の舟

旧石器時代の舟については、私の知る限り、図2のようなドイツで見つかった鹿角の骨組みが、唯一の例であり、その骨組みに皮をはった舟が復元されています。当時（後期旧石器時代）は、今より寒い気候だったので、北海道と同じくらいの気候だったと考えられます。このような皮舟は、北方地域では有力な交通手段になります。

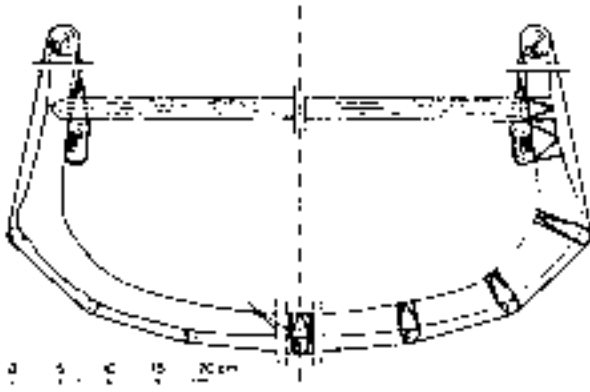


図2 旧石器時代の舟と航海

その他、丸木舟、葦などを束ねた舟、樹皮の舟など、色々の舟の候補があります。図3に表したものは、人類が旧石器時代に海を渡った証拠とされるものです。図の白い部分が現在の大陸であり、少し黒くなっているところが、海面が低くなっていた時代の大陸の範



図3 旧石器時代の舟と航海

囲をあらわしています。寒い気候の時代には、地球の水が極地に、たくさん蓄えられるため、海面が低くなります。この頃、東南アジアとフィリピンなどは陸でつながっていましたが、オーストラリアは海で隔てられていました。また玄界灘は大きな川ようになっており、北は北海道が、大陸とつながっていたと考えられます。

このような地理的状况の中で、今から約5万年前の頃に、人類がオーストラリアにわたっています。舟の形はわかりませんが、人類が海をわたったことは確かです。旧石器時代を専門とする方に聞くと、もっと古く、アフリカから人類がアジアに広がる段階で海を渡っていると教えてもらいました。ここでは少なくとも、今から5万年前頃には、人類は海をわたることができたと申し上げておきます。

図4も、非常に有名なものです。伊豆諸島の神津島は、旧石器時代、陸地が最大になった時期にも島だったのですが、この島の黒曜石が、旧石器時代後期の段階で関東平野に相当数運び込まれていました。どういう形で石材が運ばれたかが難しく、かつ大切な課題なのですが、関東平野の誰でもが、海を渡って神津島に行けたとは考えられません。おそらく、海岸地帯の海を熟知した集団を通じて、人から人へと黒曜石が流通していたと考えられます。

アフリカやオーストラリアの、首長制より以前の交易活動においては、さまざまな物流の形態が観察され



図4 旧石器時代の舟と航海

ていて、いわゆる商人とは違う交易の型がたくさん知られています。例えば、海辺の人は魚がたくさん捕れたら、山の人にプレゼントする。山の方は、山の木の実はたくさん実ったら、それを海辺の人にプレゼントするというような例 (exchange friend) などは、物々交換でもなく、今の商業的交易とも違う物流の在り方です。それらは総じて相互に恩恵をえる、互恵的交易システムと呼びたいものです。

### ヨーロッパ新石器時代の丸木舟

新石器時代の丸木舟は、ヨーロッパで数多く発見されています。図5左は、スイスの湖上住居遺跡からみつかった丸木舟です。図5右は、ヨーロッパで丸木舟が発見された場所を示しています。これは1950年代に作成された図なので、さらに多くの発見例があると思います。



図5 ヨーロッパ新石器時代の丸木舟

今から1万年くらい前から4千年くらい前の新石器時代に、たくさんの丸木舟が中緯度地帯で使われました。丸木舟は、たいいていこわれて出土するため、全体の長さがわからないものが多いのですが、図6は、全体の長さ、幅、高さがわかるものについて、グラフで表したものです。横軸が長さ、縦軸が幅になります。だいたい5mを中心とするところにピークがあって、7mから8m、10mくらいになると数が少なくなります。15mという特別大きなものがありますが、これは鉄器時代の例です。舟と船の区別は難しいのですが、私は長さ10mをおよその境として、舟boatと船shipに

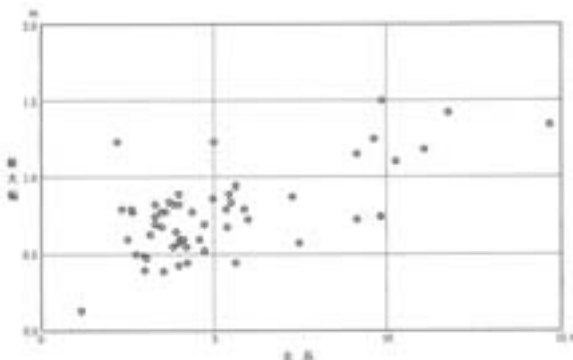


図6 ヨーロッパ・丸木舟の大きさ

わけています。

新石器時代には、長さ10mに満たない、人も物も多くは運べない丸木舟を利用していました。物流は活発でした。

### 新石器時代の黒曜石流通

図7に、新石器時代のミロス島産黒曜石の流通を示しました。ミロス島は、エーゲ海の中にあり、ミロの

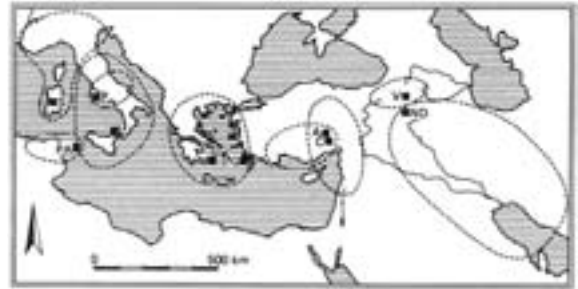


図7 新石器時代の黒曜石流通

ビーナスが発見されたことで有名です。ミロス島は黒曜石の島であり、その石材はギリシャ、トルコ、クレタ島に至るまで広く流通していました。西アジアでは川筋を通じて、また、沿海と内陸河川の交通を通じて、黒曜石が広く伝わったと考えられます。日本列島と同じくらいの面積があるイタリアでも、日本列島と同じくらい広範囲な黒曜石流通圏があったことがわかっています。

舟の大きさは小さく、とりたてて技術が高いわけではないけれども、物資は非常に良く動く。このような現象が広くみられるのです。

### エジプト新石器時代のパピルス舟

エジプトにはパピルスの先を結んで作った舟があり、この形態の舟は、新石器時代から19、20世紀の初めまで使われていました。

エジプトの王墓を調査した際に、パピルスでつくられた葬送の舟がみつかりました。これは、中王国時代、文明の段階のものであり、この時代は、パピルス舟ではなく、木造船が造られていたと考えられます。

しかし、儀式に使われる舟では、船首の部分がパピルス舟の形を踏襲しており、古い舟の形が精神的な部分に残されているといえます。

### 帆船の登場

帆をつけた舟が、いつ頃登場するのかについては、図8の舟が一つの候補になっています。ただしこれについては、帆船と認める人と認めない人がいます。図8は紀元前5000年くらい前のイラク、エリドゥという都市の墓から見つかった舟の模型ですが、舟にお箸くらいの棒をたてるホゾ穴があいていることから、それが帆柱を立てた穴ではないかと考えられています。こ

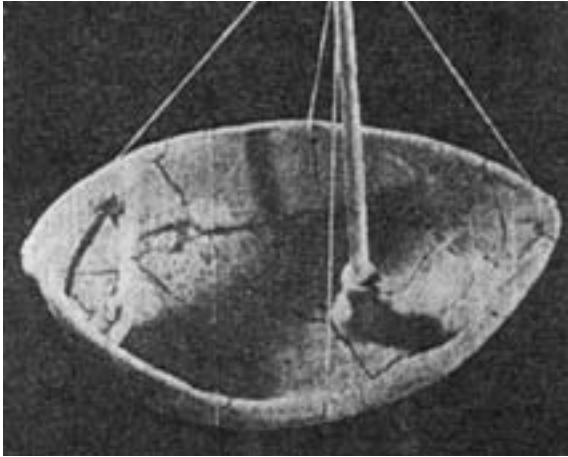


図8 最古の帆船？

れが、一番古い帆船の例になる可能性があるものです。

そして今から5000年前頃には、たしかに帆船が出現したことが、ユーラシアの西半分地域の歴史で重要です。この地域では、メソポタミア、エジプトなどから文明がおこったのですが、その象徴が車と船です。この船は、一見パピルス舟の格好をしているのですが、家畜がのっており、人が立って作業しているのです、パピルスの舟の形を意識した木造船と考えております。

紀元前3000年くらい、日本では縄文時代中期くらいの時期は、ユーラシア大陸の西側で、文明が大変に発達した時期であり、人力による牽引、動物による運搬、造船を描いた図像が残されています。これらの舟の特徴は、いくつもの部材をつなげて舟をつくらせていることです。これらの舟が、文明社会の創出に大きな役割を担いました。

#### 最古の大型木造帆船

図9は、エジプトのクフ王のピラミッドの前に奉納された船です。これは全長43.4mの大型船であり、エジプト第4王朝の頃、紀元前2600から2500年前頃のものと考えられます。これが詳細が一番よくわかる最古の大型木造帆船です。



(全長43.4m, エジプト第4王朝, Jones 1995)

図9 最古の大型木造帆船

ひとつ舟の歴史で誤解されているところですが、必ずしも丸木舟→準構造船→構造船という推移をたどったわけではないのです。

エジプトでは、船底に丸木舟を使っているわけではなく、竜骨を使っているわけでもなく、船底から舷側まで板材をつなぎ合わせて、骨組材で補強して造った船です。このような船が、文明の段階で、それまでの舟とは全く違った大型木造船として出現します。

このような構造の船は、王の船、軍事用の船としての役割を果たしました。古代文明においては、商船よりもまず、王の船、軍船において大きな技術革新がみられました。

その造船技術にかかせないのは、青銅製のノミや斧などの道具と、その道具によって成立したホゾ結合技術です。これらは王権により工人が編成されたこと、青銅資源・木材資源が確保されたことによるものです。エジプトは、何度かパレスティナを植民地化すべく、遠征を行っていました。その理由として、ティムナという銅鉱山があったこと、レバノンに優良な木材があったことがあげられます。王権の威信を高め、海軍の力を強めて領土を広げ、有用資源を確保することによって、古代文明の技術が成立したのです。

#### 交易港の原風景

この古代文明の段階でおこった王権の強まりは、いろいろな波及効果をもち、商業的取引の端緒を生み出しました。図10は、エジプト、テーベにあるイピ墓の壁画ですが、船乗りと地元の人が、物資の取引をしている状況が描かれています。



王権の強まりは、色々の波及効果をもち、商業的取引の発展はその最も重要な動きである。

王権・官僚による取引活動、海洋民の活動の飛躍。  
互惠的取引→商業的取引

(テーベ, Ipy墓  
Kamp1989)

図10 交易港の原風景

商人がどこから出てくるのかは、非常に難しい問題ですが、いくつかの起源があって、伝統的取引にたずさわっているひとのなかから出てくる場合もあれば、王権や王権の官僚が、国家運営の中で巨大な物資を動かす中から生まれてくる場合もあります。

前者のような例に、互惠的取引から商業的取引への発展がみられますし、図10で示した交易港の原風景は、王権による活動から派生してきたものであるといえます。

### 準構造船の出現

次に、準構造船は、どのように出現してくるのかという問題です。丸木舟に船首材、船尾材、舷側板を付加することにより、準構造船、板綴船というものになります。

エーゲ海では古くから丸木舟を利用しており、青銅器時代前期に文明地域の大型船造船技術を導入し、丸木舟に船首材、船尾材、舷側板を付加して、準構造船ができていきました。東アジアや西アジアでも、同様なプロセスで準構造船が作られていったものと考えております。

これと同じ頃、イギリスでは、紀元前1500年頃に、板綴船が作られました。全長13.3mのものです。ヨーロッパの北の端、当時は辺境の地域であったイギリスで板綴船が先進文明の影響を受けながらつくられることによって、先進文明に近づいていくことになります。エーゲ海では、青銅器時代中・後期(紀元前2000年)には、竜骨をもつ構造船が登場します。これがユーラシアにおいて、大きな変革を生みます。竜骨が作られることにより、海洋航海の能力が著しく向上したわけです。この技術開発が、西アジアやエジプトなど初期文明地域の外のエーゲ海域で生み出されたことが重要です。

その後、ユーラシア大陸では、地中海の造船技術が一番高い技術をもつようになりました。図11は、鉄器時代(紀元前1000年)のフェニキアの船です。ペルシャの陸軍とフェニキアの海軍が合同でギリシャに遠征している様子を描いています。図に見える3段オール軍船を初めて開発したのは、フェニキアだと考えられています。



図11 フェニキアの船

図12はギリシャ、アテネの軍船です。紀元前8世紀頃の2段オールの軍船と、紀元前480年のサラミス海戦の主力艦だった3段オール軍艦を復元したオリンピア号です。フェニキアの3段オールの船に対抗するために、2段オールの船の船縁にもう一段加えた3段オールの船になります。その後、ギリシャが覇権を握り、スパルタ、マケドニア、アレクサンダーの時代へと移っていきます。

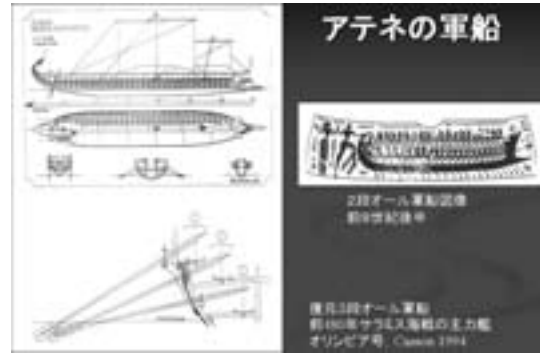


図12 アテネの軍船

### 港湾都市アテネ

港湾都市アテネがどのようなものであったかについて申し上げます。アテネ自体は内陸にあり、湾岸には外港がありました。しかしペルシャやスパルタとの軍事的な緊張が強まると、港をピレウスという防御に適した場所に移し、城壁で囲まれました。さらに、港からアテネまでの道も城壁で囲み、一体化しています。これを港湾都市のひとつの形態と考えて良いだろうと思います。前近代の港湾都市は、海辺から少し離れたところに作られることが多いのです。

西洋では、旧石器時代、新石器時代に舟を使用していました。初期文明の段階になり、王の船や軍船の造船で大きな技術革新がおきて大型の船ができ、商業的交易も発展してきたわけです。このような中で、港湾都市が発生しました。

### 東洋における舟・船の歴史

#### 中国新石器時代の舟

図13に中国新石器時代の浙江省河姆渡遺跡や、商周時代の山東省毛子溝遺跡の丸木舟関係資料を示しています。隋代の山東省平度県から出土した船は、丸木舟を改良した準構造船です。

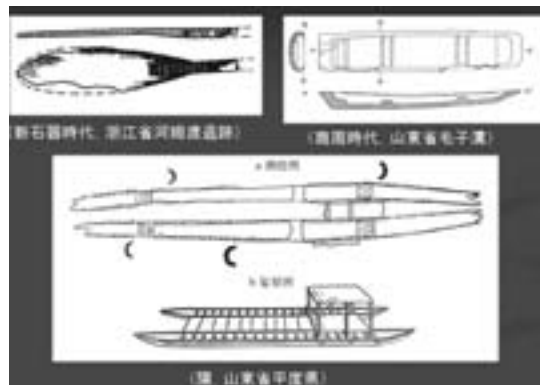


図13 中国の丸木舟・櫂

#### 中国戦国時代の船

東アジアで西アジアの大型船に匹敵するものが、確実に出現するのは、戦国時代(紀元前5世紀から同3

世紀頃)からです。四川省の画像石には、船倉でオールを漕ぐ人、甲板で戦う兵士が描かれており、この時代には甲板をもつ船が登場していることがわかります。同じ頃、河北中山国墓葬船には、舷側板を鉄のタガでしめるといふ、西洋にはない技術が出現しています。

このように戦国時代には、確実に構造船が登場するだけではなく、甲板をもつ軍船が登場しています。これらの構造船の出現がいつまでさかのぼるかについては、現在資料がなく、不明です。

ただし甲骨文字が出現するころ(紀元前1500年前後)、舟、般、盤という文字がみられます。これらの舟を表した甲骨文字をみると、丸木舟ではなさそうです。私は、船の大型化のはしりが紀元前1500年頃の中国で文字が生まれた頃にあり、戦国時代(紀元前5世紀)には、大型船(構造船)ができて、それが周辺地域で準構造船を生み出すインパクトになったのではないかと考えております。

図14は、宋の時代に描かれた漢時代の船です。そこには楼という高い建物があり、指揮官がみられます。船体の表現には、宋代の船の特色もみることができます。漢代の記録には数千人がのれる軍船の記録があり、戦国時代の軍船から一段階飛躍した船が、秦漢時代に造られた可能性があります。



図14 漢楼船画像

### 中国の港

港がどのようなものか、中国山東省蓬萊市登州(水城)についてみてみます。遣唐使に詳しい方は、ご存じだと思いますが、登州港は、北まわりルート遣唐使が寄港して、ここから長安城へ向けて出発する地です。ここには巨大な入り江があり、行政施設や町場、道教関係の寺院などがこの港内に位置していて、ひとつの港湾都市を形成しています。この港から海揚がりの遺物として、新石器時代から近代までの資料がみつ

かっています。おそらく、この場所は、新石器時代から港だったところと考えられます。その沖合の長島では、新石器時代の丸木舟の資料がみつかっています。登州の港と朝鮮半島、遼東半島との間で、島づたいの航海が新石器時代から行われていて、連綿として現在まで港として発展し、その歴史の一コマとして、遣唐使が寄港したものと考えられます。

### 日本の船

#### 縄文時代の舟

日本における丸木舟については、200件くらい発見されていると思います。

千葉県で発見された縄文時代中期の丸木舟には、錨石が積まれた状態でみつかっています。ホームページを検索してみると、石狩市紅葉山49号遺跡から丸木舟の舳先部分がみつかっています。

アイヌの丸木舟(チブ)と板綴船(イタオマチブ)にみられるように、中国沿海地方から日本列島にかけて、丸木舟の文化がひろがっています。そのなかで、イタオマチブのような板綴船が出現することは、エーゲ海の板綴船出現と同様に、大きな歴史的意義があったものと考えられます。

#### 弥生時代の船

中国の大型船の技術に対して、日本で丸木舟に船首材、船尾材、舷側板を付加する技術がみられるようになるのは、今から約2000年前頃の弥生時代です。図15の上段は、福井県井井向出土銅鐸に描かれた船団です。中段は、鳥取県青谷上寺地遺跡出土木製板材に描かれた大型船と小型船の船団です。小型の船は10m前後、大型のものは、それ以上と考えられます。下段は岐阜県荒尾南遺跡出土の弥生土器に描かれた大型の船です。大型船のまわりに、小型の船が描かれています。

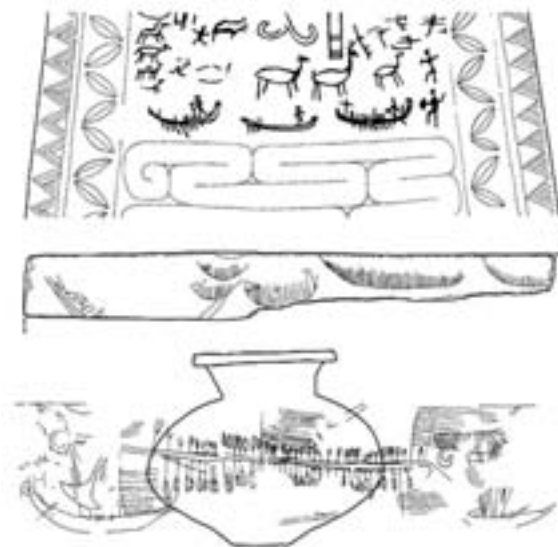


図15 弥生の船団

弥生時代になり、船団が描かれるようになるのと同時に、大型船が描かれるようになりました。小型の船が10m前後であるなら、大型船は、20m位の大きさになると考えています。その場合、200トン100名以上が乗れる遣唐使船に匹敵するくらいの船になる可能性があります。荒尾南遺跡の船には、帆らしいものが描かれています。中国でもこの頃、帆のある船が記録されています。

図16は、深澤氏による弥生時代の船集成です。弥生時代というと、北海道では続縄文時代、フゴッペ洞窟の岩壁刻画の船がこれらと同時期と考えられます。中国沿海地方、日本海をとりまく地域、シベリアに至るまで、中国中原の船とは少し違うけれども、中国の大型船のインパクトを受け、周辺地域で準構造船を造るようになったものと思います。



図16 弥生の船

#### 弥生時代の船着き場

弥生時代の船着き場の様相を示すものに、長崎県原の辻遺跡があります。今でも基盤工事に使われていますが、土を敷いて、粗朶を敷く工程を繰り返した後に、石を敷いています。これは10mクラスの船の船着き場だったと考えられますが、これが日本列島で一番古い船着き場施設です。それは、中国で造船技術が飛躍的に発達した時代と重なっているといえます。

外港とは、本拠からやや離れた場所で、大型船から小型船に積み荷を積み替える場所です。岡山県倉敷市上東遺跡の船着き施設は、やはり土と粗朶を敷いてつくった波止場です。外洋船がこの外港まで来て、川船に積み荷を積み替えたと考えられます。これは、初期のアテネの在り方に近いものです。

先ほどの原の辻遺跡を考古学でどう捉えるか、意見がわかれるところなのですが、私は、壱岐国の首都と呼んでいて、本格的な国家以前の、都市国家アテネのような段階と考えております。

#### GISを利用した弥生時代遺跡からの眺望

図17は、GISを利用して、弥生時代、原の辻遺跡から見える地域（眺望範囲）を、表したものです。原の



図17 原の辻遺跡からの可視領域

辻遺跡の中心である、大型建物跡の位置で、高さ1.5mから、どこまでがみえるかを分析しています。GISのソフトウェアを利用すると、簡単に図示することができます。原の辻遺跡からは平野はよく眺望できますが、海はほとんど見えません。壱岐国で一番大きな遺跡は、原の辻遺跡であり、二番目は、カラカミ遺跡になります。原の辻遺跡には三重の濠が巡らされているのに対して、カラカミ遺跡では、一重の濠が巡らされています。カラカミ遺跡からは、島内は山が少し見える程度ですが、大陸との交通で重要な対馬南部がよくみえます。また、九州北部の一部もみることができ

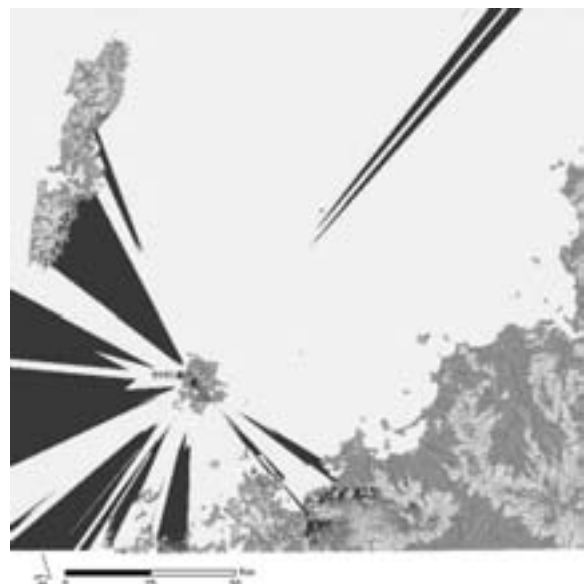


図18 カラカミ遺跡からの可視領域

す(図18)。このことは、非常に周到な計画性をもって、壱岐島(壱岐国)に首都と外港を配置したことを示しています。その背景には文明情報に対する深い理解があったと考えます。このようなことを検討するためにGIS(地理情報システム)を考古学に利用することが、私の最近の目標です。

佐賀県吉野ヶ里遺跡も、有名な弥生時代の遺跡ですが、図19にみるように有明海が非常によくみえる位置にあったことが判ります。香川県紫雲出遺跡では、遺跡の西端、東端、北端からの眺望範囲を合成しました。紫雲出遺跡が瀬戸内の海の航路を見渡せる位置にあったことが理解できます。

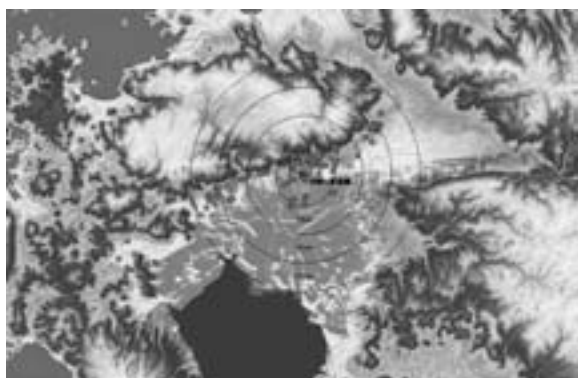


図19 吉野ヶ里遺跡からの眺望範囲

弥生時代は、王権が海の航路を掌握しようとした時代であることが、弥生時代の主要な遺跡からの、GIS眺望範囲分析から判ります。この次のステップは、航路の復元になるわけですが、航路の復元には、眺望範囲内にある遺跡を細かく検討することが、必要になってきます。

私は、弥生時代から律令国家までの間には、造船技術には大きな変化がなかったと考えております。弥生時代から遣唐使船に匹敵する船はあり、東シナ海を自由に航海できるような船は、次の段階(唐末、9世紀以後)に出現しました。

#### 古墳時代の船

古墳時代の船は、基本的に弥生時代の船と同様であったと考えています。図20は、古墳時代前期の兵庫県袴狭遺跡から出土した板材に描かれた船団です。大きな船を取り囲むように小さな船があり、護送船団の形を、表現しています。後の阿倍比羅夫の遠征などでも、大型の旗艦を小型船がまもる形の船団が、派遣されたものと考えています。

奈良県天理市東殿塚古墳出土埴輪に描かれた船は、



図20 板に描いた古墳船団

丸木舟に材を足した準構造船を示しています。

三重県松坂市宝塚1号墳出土ゴンドラ形埴輪船は、おそらく当時の最大の船をあらわしたものです。

5世紀の二股形埴輪船をモデルに板綴船(なみはや)が復元されています。

#### 北海道における板綴船の出現

こうした板綴船が、北海道でいつでてくるのかということが、私が今回の講演会をお引き受けする上で、最大の関心事だったのですが、札幌市K39遺跡で擦文時代の板綴船の舷側板が出土していることを伺いました。私は、この板綴船は、中国の造船技術進歩に伴い、周辺のアジア諸国にまで大型船建造技術がひろがった一例と考えております。

これからもっと古い出土例が北海道で見つかる可能性もありますが、擦文時代は、本州の律令国家と北海道の社会が、密接な関係をもった時代であったと考えられます。戦争や交易など、さまざまな形で交流がなされ、そのような時代に、板綴船が出現していたことが、私にとっては、意義があることと思われま

す。このような板綴船を各国の博物館などにいくたびに探しては、台湾高山族の板綴船は、先ほどお話しした中国中原の造船技術が周辺のアジア諸地域に伝わる過程で出現したものと考えられます。

今までお話ししたことが、私の話の前半部分です。丸木舟や葦、パピルスの船などで交易のネットワークが成立した段階から、古代文明社会に移行する段階で飛躍的な造船技術の革新がありました。その技術は、文明社会内にとどまらず、周辺の諸国・諸地域に影響を及ぼして、船の大型化がすすみ、板綴船・準構造船や構造船がつくられるようになります。

#### 王権の船から商工業の船へ

この時期、商業的交易も拡大するのですが、それも王権の強化とかかわることが多かったと考えられます。

これに対して、船の歴史の後半は、王権に対して、商業的な交易が卓越してくる段階といえるでしょう。結論から申しますと、ユーラシアの西方でも、東方でも、西暦9世紀、平安時代の初め頃を境として、王権の時代から商工業の時代に転換していったと私は考えております。

#### 北欧の船

ユーラシア大陸の西側で、2番目の造船技術革新が行われたのは、エーゲ海周辺とご説明しました。さらに新しい時代になると、北ヨーロッパが造船技術の中心になってきます。

西暦2、3世紀くらいになると、イギリスほかの造船技術が急速に高まってきて、一番よい船は北欧の船

になっていきます。北欧の弾性に富んだオーク材が造船に利用されるようになると、スギ材やマツ材などを利用する地中海の船よりもよい船が造られるようになったのです。

図21は、紀元2世紀、ローマ時代の港湾都市ロンドンでみつかったブラックフライアス船です。この船の特徴は、肋材と舷側板を鉄釘で結合することであり、それはオーク材を潤沢に利用できる北欧の船の特色ある技術です。なお、スギやマツを利用した従来の船では、舷側板をホゾで結合することが特徴となっていました。



図21 アルプス以北の船の台頭

このことにより、これまでの外壁先行法に代わり、クリンカー船や、骨組み先行法による造船の端緒となっていきます。

クリンカー船は、舷側板を少しずつ重ね合わせて、船釘で結合しますが、オーク材の弾性により強力な船体と、軽量で高速という特色をもつ船です。

図22は、紀元7世紀、ブリテン、サットンフーの東アングリア国の船であり、長さは30mにちかく、この時期の最大の船です。この当時の船の大きさは、オーク材一木に制約され、およそ30mくらいが最大の全長となります。それ以上の規模の船をつくらうとすると、違う技術による必要があり、クリンカー船とは、大航海時代の前段階では、最高の船といえます。

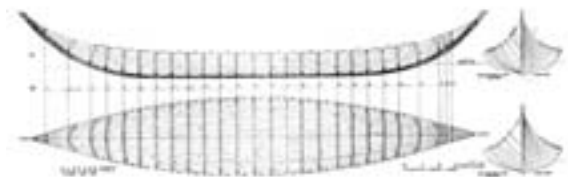


図22 大型クリンカー船

図23は、北欧の人たちの船に対する精神的な部分を示すものであり、船を墓室として利用していることが判ります。このサットンフー船の資料は、大英博物館で見ることができます。

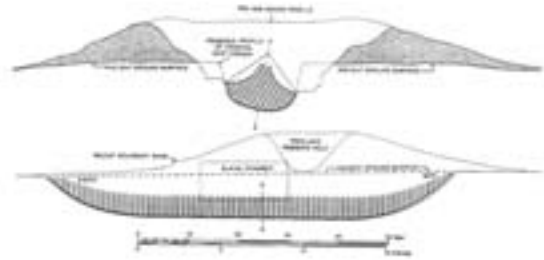


図23 船葬墓の構造

サットンフー船葬墓の副葬品には、高い工芸技術になる武器、武具、青銅の容器などがあり、その中にはキリスト教との関わりを示す碗、皿、スプーンなどもあります。これらは東アングリア国宮廷工房の製品と、地中海域から招来した品を合わせて、この墓に葬ったものであり、東アングリア国王の力を示しています。

これに対して地中海域では、ローマ帝国以降、王の力はあまり大きくなり、商人の力が徐々に大きくなっていきます。この頃の地中海の船は、造船技術を簡略化して、舷側板をとめるホゾの数を少なくしていきます。安価な商船が増加したことに特色があり、中、小の商人が成長してきたことを示しています。

このころ、アルプス以北の勢力と地中海の勢力が戦争した場合、地中海の勢力は軍隊を船に乗せて、上陸に成功すると勝ち、北側の船が南側の陸地まで船団を捕捉して海戦に持ち込むと勝つ、という状況が続いています。これを造船技術からみますと、北の総オーク材造りの船と南のホゾ穴省略船の戦いであったことが判ります。

### ヨーロッパ中世都市のはじまり

私は、9世紀を境として、ヨーロッパの中世社会ができあがってくると考えております。

ヨーロッパの都市は、多くがローマの都市に起源をもちます。ローマが衰退した後も、人口が減りながらも、その地域の政治中心として、ずっと存続することが多かったのです。

図24で示したものは、イギリスの港湾都市ヨークです。ローマ時代のヨークは、十字に交差する道路と、四角い城壁が特徴で、8世紀頃までその基本的な形が維持されました。ところが9世紀にはいると、川を挟んだ兩岸の部分が一体化し、道路の区画も規則性がなくなってきます。このような都市形態は、ヨーロッパ中世都市のはじまりといえるものです。

都市の中心部かつ川の近くには行政施設や広場があり、道路は不定形であって、商工業の単位となる通りからなっています。このようなヴァイキングの都市の例として、9世紀のロシア・ノブゴロドの図25を示しました。

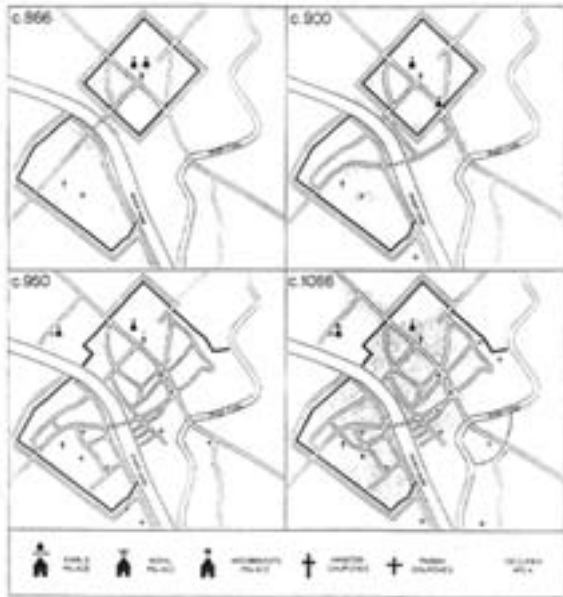


図24 ヨーロッパ中世社会への転換

### クリンカー船とコグ船

図26は、デンマーク・スクルデレブの、クリンカー帆船です。クリンカー船は、本来は帆を持たず漕走する王の船なのですが、この頃に帆船となり、14世紀に至るまで主要な商船として、活躍しました。

もうひとつヨーロッパで重要であるものは、川船起源の商船です。10世紀デンマーク・エガースンドの船は、川船を大型化させていって、荷物の積載量を多くしています。14世紀、ドイツ・ブレーメンの船に至ると、船底が平底で積載量が大きな、コグとよばれる船になっています。このような形態の船が、ヨーロッパ



図25 水運を基軸とするヴァイキング都市

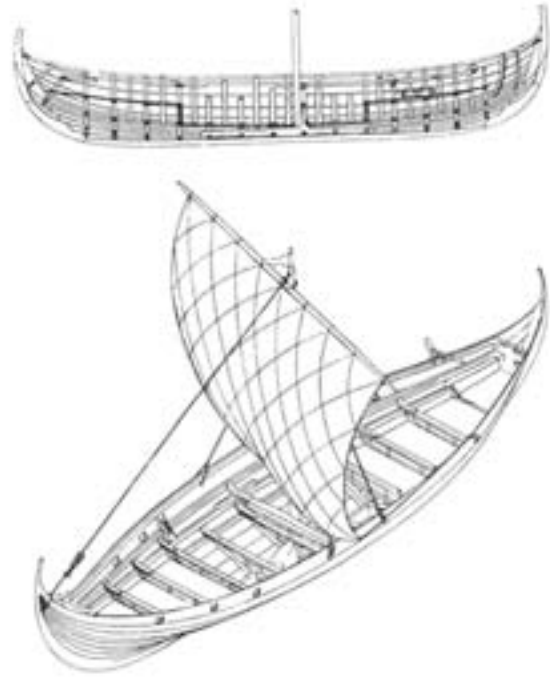


図26 ヴァイキング商船の活躍

中世の船として活躍しました。

### ガレー船とガレオン船

14世紀以前の船は、船の大きさが一木の長さに規定されていて、およそ全長30mのものが最大でした。しかし、この頃、もっと大きな船の需要ができてきて、竜骨と肋材の骨組みに、舷側板を張り足していくという技術が発達していきます。これは現在の造船技術に連なる骨組み先行法と呼ぶ技術です。

この型の船は一木材の弾性で船体を保持するのではなくて、竜骨と肋材などの骨組みで支える構造になってきます。このような船が、大航海時代を生むわけです。このような時代になりますと、王の威信よりも、商業的な需要、船の技術革新の原動力になっていきます。

16世紀の大型ガレー船（帆走・漕走併用船）は、上記の技術により、このような大西洋を横断できる船ができて、それはまもなく、日本列島近海にあらわれます。

図27は、17世紀のガレオン船です。これは軍船兼商船という性質のものです。平時は商船なのですが、商品の安全のため大砲などで武装しているものです。これらは戦時には軍船に早変わりし、イギリスとスペインの無敵艦隊が戦った時には、イギリス・エリザベス女王の海軍として活躍しました。

これ以降の時代になると、資料が膨大になるため、すべてを紹介することはできません。

18世紀には、世界各地を探検したクック船長が使用したインデヴァー号があり、さらに19世紀半頃になると、クリッパーという快速帆船が、オーストラリアや中国の商品を積んで高速でヨーロッパに運んでいま



図27 17世紀のガレオン船

した。カティーサーク号はクリッパーを代表する傑作と評価されています。

この時代になると、大型帆船の積載量は、3000トンを超えて木造船の力学的な最大の大きさになっています。この大きさでも商業的にはまだ小さいということで、次の造船技術革新がなされました。

#### 蒸気機関車と鋼鉄蒸気船の登場

19世紀半ば頃、産業革命を代表する発明といえば、蒸気機関車と鋼鉄蒸気船です。図28は、初期の鋼鉄蒸気船を代表する1843年に進水したグレートブリテン号です。鋼鉄の骨組み、鋼鉄の舷側板からなる船体に、蒸気機関を搭載しています。これまでは風力が非常に重要な役割を果たしていたのですが、蒸気機関を搭載する船が登場しました。

このように、9世紀以降は、商業の発展に基づく、積載量増大のニーズや、商品搬送期間の短縮というニーズが、造船技術発達の最大の要因になったといえます。

それではそれに対応するような動きが、東アジアにあったのかどうか、ということになります。

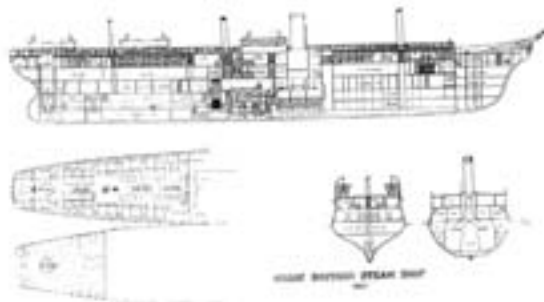


図28 鋼鉄蒸気船の登場

#### 泉州湾沈没船

クリンカー商船に匹敵する役割を果たしたものが、これからお話しする福建省泉州湾沈没船です。この船は非常に有名であり、ご存じの方も多いと思います。

泉州は国際的港湾都市であり、泉州湾は、当時水深7mくらいでしたが、そこにこの船が沈んでいたの

す。この船は。それまでの造船技術とは全く違った技術でつくられていると考えられます。

引き上げられた泉州湾沈没船は、龍骨があり、舷側板を縦につなぐ構造です。この船の一番の特徴は、隔壁にあります。いくつもの隔壁で、船体を強化していますが、このような船に軍隊が乗ると軍船、商品が積まれると商船になります。商船では、船の幅が広く、軍船では船の幅がせまい、という特徴があります。

西洋の船であれば、竜骨とともに肋材を使用しますが、この船には竜骨はありますが、肋材がなくて、隔壁が外壁を支えている構造になっています。船の舷側板側から隔壁に向かって、船釘を打ち込んで造っているのです。この技法を、私は、東洋独特の隔壁先行法と、よんでいます。

この船の造船地は中国の南部であり、柔らかい材で、船体を作っていますが、隔壁で支えることによって、強度を確保しています。このような船が出現するのは、唐末～宋代ですが、それは中国南部の商船が日本に、直接渡航してくる時期と重なっています。

その積み荷をみると、南方の物産が多く、香料、薬材、胡椒などの、フィリピンや東南アジアからの積み荷を、中国、日本、朝鮮に運んでいた船と推定できます。

その証拠としては、船中から発見された木簡に「山中」と書かれているものがあります。これは荷札ですが、日本人の人名と思います。また別の木簡に書かれている「亜哩」は、アリと読み、イスラム圏の人だと考えられます。イランやイラクにいるアリさんなのか、中国にいるアリさんなのか、詳細はわからないのですが、積み荷が、中国、日本、イスラム圏など広範囲に動いていたことを示すものです。

このような船が9世紀の後半から10世紀にかけての頃に登場し、それは東アジアの港湾都市が発達する時期と重なっています。

#### 東アジアの港湾都市

現在の泉州城は、海岸部からやや奥の河川屈曲点に都市があり、湾に面して外港があります。ここは唐代には泉州城という役所があっただけなのですが、五代から両宋代になると、役所のまわりに町場ができてきます。城壁の形態は四角かったのですが元・明・清代になると、川筋を重視して、不定形な城壁を築きました。

浙江省寧波では、船着き場から北宋時代の隔壁先行工法による大型船が出土しています。遣唐使が上陸した唐代の寧波(明州港)では、外港があるだけでした。それが港湾都市になるには、2つのステップがありました。第1のステップは9世紀の第2四半期で、遠くにあった役所がここに移ってきています。もう一つのステップは9世紀の終わりで、町場を囲むように川筋

優先の不定形な城壁を建設しました。これらにより、外港が港湾都市になっていくのです。

それは東アジアでの大きな出来事であり、王権主導から商業主導へと移り変わりつつあった大きな出来事と考えています。

### 元代の軍船

山東省蓬萊市からみつかった元代の軍船のような形態の船が元寇の時に日本に来たはずであり、将来、博多湾あたりでみつかるかと思えます。この船も隔壁先行法であり、竜骨はあるが肋材がない構造です。

このように北宋以後の時代には、中国北部でも大きな変化が生じました。

北宋の首都、東京城は、二重の城壁をめぐらす、巨大な都市ですが、伝統的な真北方位にはこだわらない造りになっています。それは、水運を重視した結果であることが明らかであり、都市の中では黄河と長江を結ぶ運河、河南省許昌と結ぶ運河、安徽省寿県と結ぶ運河、齊魯（山東省）と結ぶ運河などが、張り巡らされています。

さらには中国の首都は、次第に中原地域から沿海地域へ移動していきます。そして天津を外港として、渤海湾に連なる遼の南京城、金の中都城、元の大都城、明清の北京城が建設されました。

### 日本列島水運の時代

日本列島の水運の時代については、いろいろところで発表していますので、私の論文などをみていただきたいと思えます。

9世紀を境として、遣唐使が介在して国際交易を行う在り方から、中国商船が来日する時代になります。このころから古代都市、平安京の形が変容して、鴨川の東側、鴨東を開発することによって、鴨川を中心とする中世都市、京都が成立してきます。窯業・製鉄・塩業などの生産分野では産地の集約化が進み、特産品生産と広域流通が発達していきます。

九州では太宰府から博多へ中心が移っていきます。平安時代の終わり頃になると、海辺の都市鎌倉が成立します。そしていろいろな場所で、中世港湾都市・港町が発展しました。

日本の首都がどこにあったかということは、厳密にいうと非常に難しいのですが、実質的な統治機能をもつ安土城、大坂城、江戸城が建設されたように、海辺に最大の政治都市が造られました。ユーラシア各地と共通する状況が、日本列島にもおこっています。

中世のような分権的な時代に、廻船商人たちが、どのように船を運航したかは、興味深い問題であります。GISによって北東日本海域の山岳宗教霊山山頂からの眺望範囲を重ねてみると、この海域を廻船した人は、必ずどこかの霊山が見えるという状況があったことが

判ります。このことと中世商人の多くが寺社権門に属していたことは無関係でないと思えます。

中世港湾都市のひとつ、青森県青森県十三湊遺跡は、霊山と宗教権門関連地区・武家関連地区・町場が有機的な関係をもって、港町を形成していたと考えられます。

日本の遣唐使から中世にかけての船が、どのようなものかということは、まだ判っていません。ただし、泉州湾沈没船などの例により、隔壁先行法の造りで、200トンから300トンが標準的な大きさの船であり、日本でもそれに船を造船できたと推測しています。

### おわりに

最後に、旧大陸の水運の推移をまとめます。

旧石器・新石器時代には、活発な舟運・互恵的交易がなされてきました。そして古代国家形成にもなって船の技術革新がなされて、王の船や軍船が生まれて、商業的交易も派生しました。これに対して中世・近世は、商業的交易が飛躍した時代であり、特に9世紀はユーラシア水運の時代の幕開けとなりました。その後、大航海時代には、旧大陸と新大陸を結ぶ世界システムが形成され、覇権が争われました。そして近代になり、国民国家と領土・領海が確立する頃、産業革命において鉄道・鋼鉄蒸気船が発明されましたが、国内交通においては陸運が卓越するようになります。

以上、長時間にわたり、少々荒っぽいことも申し上げましたが、私が地域の歴史を世界史に位置づけるとしたら、このようなストーリーになるのではないかとということで、お話しさせていただきました。

ご静聴ありがとうございました。

<図出典><図2>Wright, E. V. 1990. The Ferryboats: Seacraft of the Bronze Age. London, Routledge. <図4>小田静夫1997『伊豆諸島・神津島の黒曜石』『堅田直先生古希記念論文集』堅田直先生古希記念論文集刊行会<図5>Arnold, B. 1993 Logboats of the 6th Millennium BC Discovered in Switzerland, In Coles, J. et al (eds.) A Spirit of Enquiry: Essays for Ted Wright. Wetland Archaeology Research Project, Nautical Archaeology Society and National Maritime Museum, Exeter, Short Run Press. Clark, G.R.D. 1952 Prehistoric Europe. London, Methuen & Co. LTD. <図6>McGrail, S. 1978. The Logboats of England and Wales, Bar, no 51. <図7>Torrence, R. 1986. Production and exchange of stone tools: Prehistoric Obsidian in the Aegean. Cambridge University Press. <図8>Lloy, S. and Safer, F. 1948 Eridu, Sumer, Vol. IV, No.11. <図9>Jones, D. 1995. Boat: Egyptian Bookshelf. London, British Museum Press. <図10>Kemp, B. J. 1989. Ancient Egypt, London, Routledge. <図11>Casson L. 1994. Ships and Seafaring in ancient times. London, British Museum Press. Basch, L. 1969. Phoenician Oared Ships, Mariner's Mirror, vol. 55. <図12>前掲Casson L. 1994<図13>河姆渡遺址考古隊1980『浙江河姆渡遺址第二期発掘の主要収獲』『文物』1980年5期<図14>王冠偉2000『中国古船図譜』三聯書店<図15>岐阜県文化財保護センター1998『荒尾南遺跡』岐阜県文化財保護センター調査報告書第26集<図16>鳥取県埋蔵文化財センター2002『青谷上寺地遺跡4』鳥取県教育文化財団調査報告書74 深澤芳樹2005『港の出現と弥生船団』『月刊考古学ジャーナル』536ニューサイエンス社<図20>兵庫県教育委員会2000『携鉄遺跡』兵庫県文化財調査報告書第197冊<図21>Marsden, P. 1994. Ships of the Port of London: First to eleventh centuries AD. London, English Heritage Archaeological Report 3. <図22, 23>Evens, A, C 1994. The Sutton Hoo Ship Burial. Revised edition, London, British Museum Press. <図24>Hall, R. 1994. Viking Age York. London, A & C. Black Limited. <図26>Wilson, D. M. 1989. The Vikings and Their Origins: Scandinavia in the First Millennium. revised edition London, Thames and Hudson. <図27>Marshall, M. W. 1989 Ocean Traders: from the Portuguese discoveries to the present day. London, B.T.Batsford LTD. <図28>Corlett, E. 1990. The Iron Ship: The Story of Brunel's SS Great Britain, revised edition, London, Conway Maritime Press. Ltd.

## (2) 冬季講演会

「土の中から出てきたよー フォトグラファー  
から見た縄文世界ー」

講師 小川忠博氏 (写真家)

### 講演の目的

今回の講演会は「わかる考古学」の一環として、考古学の成果をわかりやすく伝えることを目的として企画されたものである。写真家として考古学の世界に深い関わりを持つ小川忠博氏を講師に招聘することで、写真撮影を通してみた遺跡や遺物のもつ魅力を一般の来館者に向けて伝えることを狙いとした。講演は講師と写真との関わり、考古学との関わり、縄文の遺物の持つ魅力を伝えるという講師の仕事及び作品について、約140枚ものスライド写真を通して紹介された。ここでは個々のスライドについて加えられた解説の中からその一部を抜粋し要旨としてまとめた。

### 講演要旨

#### 【社会派カメラマンの展開写真】

早稲田大学卒業後にカメラの道に進み、社会派のフリーカメラマンとして週刊誌、月刊誌などでの撮影に携わってきた。アフリカ解放闘争のゲリラに従軍した記録である写真集『森と精霊と戦士たち』（ポ領アフリカ解放闘争写真記録）を著す一方で、こども向けの写真絵本『ゆげ』『ポッペンポッペン』『カルチョ』の製作などにも携わるほど間口の広い撮影を行ってきた。考古学の世界にかかわるきっかけとなった展開写真は自身の「写真人生の半分くらいのところで」はじめたもので、この手法を用いた作品としては『中国の文様』『縄文土器大観』『描かれたギリシア神話』などがある。

#### 【展開写真のテクニック】

考古学の世界にかかわるきっかけともなった展開写真の最初は、スリットカメラという普通



のカメラとは異なるカメラを用いたことにはじまる。これはスポーツ競技などの写真判定に使われるカメラで（図1）、シャッターがカシャッとおいた時にパシッと四角く撮れるものではなくて、フィルムがテープレコーダーのように動くしかけになっている。これを応用した装置を開発したことにより、ブルトレインの全体写真を雑誌の見開きに掲載することができた。

（図2）

展開写真をさらに発展させるきっかけとなったのはある編集者からの撮影依頼であった。これまでどおりの方法では動かすことが出来ないような貴重品に対して、回転移動させることなく撮影できる方法が必要とされたのである。これに対しては被写体の周りをカメラが回って撮影するという装置を開発することで新たな可能性を見出すことが出来た。（カラー図版2上）

このように撮影した展開写真には特徴がある。それは世界地図と同じで、基準になっている直径より大きな部分は短く写り、小さい部分は伸びて写ってしまうという特徴である。これについては処理の施しようがないことではあるが、画面上では一応シャープに写ることから絵面の展開がわかるというのは非常に大きなメリットと言える（図3）。

この独自の撮影方法をいろいろと試しているうちに縄文土器と巡り会う。それは母校の考古学教授西村正衛氏のもとで土器を撮影したのが最初である。当時では際立った特徴もないような土器であったが、仕上がった写真に浮かび上

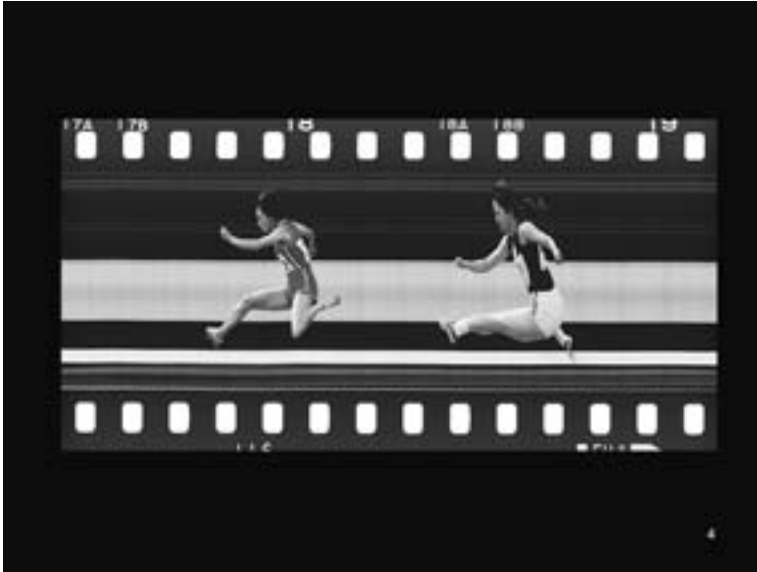


図1 スリットカメラで撮影した写真

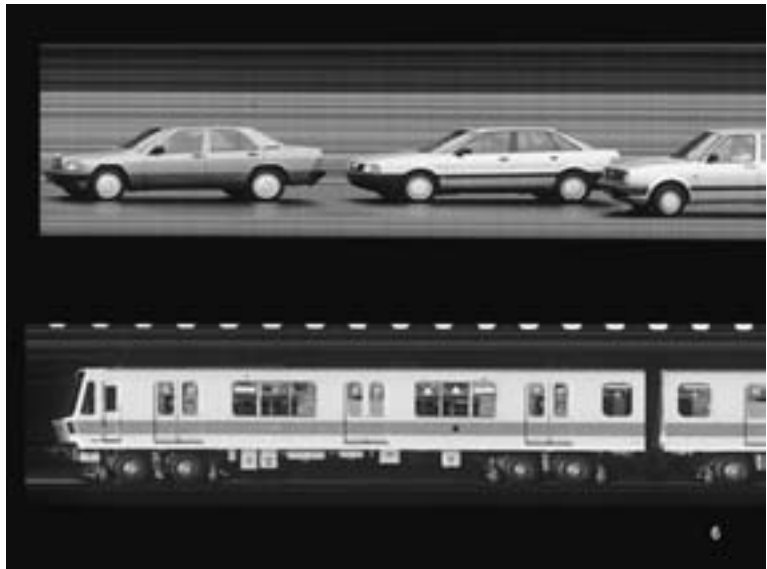


図2 スリットカメラの応用写真

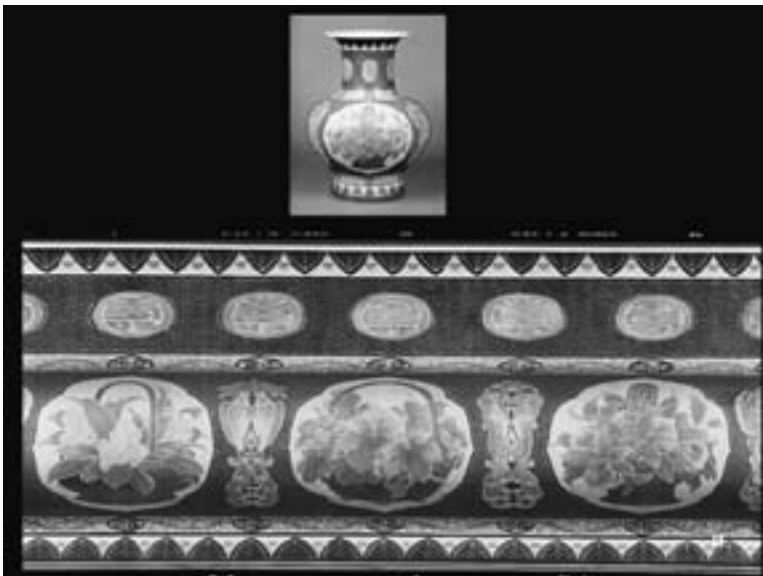


図3 展開写真の例  
(『板谷波山』小学館より)

がった縄文人の爪跡、指の跡をみた感激がその後の考古学との深い関わりを決定的なものとした。

#### 【写真撮影の姿勢】

写真家として考古学の世界に関わる自らの姿勢について考えるとき、「お宝拝見」みたいなかたちで、「良いものだけを撮らせてちょうだい」という姿勢ではまずい。なぜなら調査研究の側からすれば、異常でもなんでもないものこそ数多くあるものだというのも重要であるからだ。その上で自分の展開写真は「良いもの」に限らず普通のものも撮ろうという認識に立っている。今は日本各地で撮影行脚を行い、撮影した遺物の点数は一万点にも及んでいる。

また、展開写真の撮影の中で「これは面白いなあ」という縄文時代の様々な遺物との出会いも数多い。そのたびに「博物館のようなところでは見て下さいという形で見せるけれども、ライティングもできないし、そういう装置もなく、なかなか魅力が伝わらない。」と感じている。写真家の立場として、自分が「お手伝いできる場所はやりながら、面白い写真を撮って」、その魅力を伝えていきたいと考えている（図4）。

#### 【遺物を魅せるには】

ある郷土資料館の開設時に遺物の撮影を依頼され、「全員集合」といって無理やり集めてもらった数十点ものクマ形土製品を撮影したことがある。考古学に携わる人間ならこのような撮影は絶対しないのであるが、「こうやって撮らなきゃ面白みが伝わらないよ」といって撮ることができた（図5）。

集合写真の中には、「縄文人の家財道具」というテーマで撮影したものもある。遺構から出てきたものを一括したかたちで撮るとこのようになる。土器があって、石器があって、土偶があって、なかには矢じりがたくさんあったり、木器などもあって、縄文人はこういうものを

使って生活していたんだろうと想像しやすくなる（図6）。

また、当センターで展示されている千歳市マチ遺跡の土製仮面の撮影においても、ライティングによって土面の表情が様々に変化する様子がよくわかる（カラー図版2下）。

#### 【苦心の撮影】

「鼻曲がり土面」を撮影した際には、鼻の部分に開いた2つの穴をどう撮るかで苦労した（図7）。土偶の表情をとるには鼻の穴がとれず、鼻の穴を出す撮影をすると土偶の良さが出てこない。こういうものは遺物を立てた状態にしないとうまく撮れないということに気が付く。実際にどのようにして遺物を立てるかというのが大変で、10分20分程度で次から次へ撮るような場面ではいかに立てる道具を事前に準備できるかというところがカメラマンの課題の一つである。

去年国宝になった南茅部の「中空土偶」を撮影した際には、国宝になる前の17、8年前に最初に撮影したときには粗末な台に立てかけることができたが、国宝になってからの撮影依頼では、立たせることができないと指示された。しかし、「立てないと絶対良い写真が撮れないから」と強く主張した結果、精密な実測図をもとに作成された鉄製の支えに立てかけることができ、無事に撮影することが出来た（図8）。

#### 【デジタルカメラの活用】

石製の土偶を撮影した際、そのバラバラになってしまったものをどうやって撮ろうかと苦心したことがあり、アクリル板で傾斜の段を作り、その上に全部バラバラのものを乗せて1つの一体にすることができた。これをスキャナーで撮り起こし、デジタル画面上でアクリル部分を全部消していった結果、とても寄り掛からせて撮っているとは思えないほどの仕上がりとなった（図9）。こういうことがデジタルでは可能になるので、考古学の世界でも今後ますます



図4 縄文時代の特徴的な遺物  
北海道埋蔵文化財センター  
での撮影  
(千歳市美々4遺跡出土)



図5 クマ形土製品の集合写真  
(群馬県安中市中野谷松  
原遺跡出土)



図6 縄文の家財道具  
(左 栃木県鹿沼市明神  
前遺跡出土)  
(右 新潟県上越市籠峰  
遺跡出土)



図7 鼻曲がり土面（国重要文化財）  
（蒔前遺跡出土・御所野縄文博物館）



図8 函館市著保内野遺跡出土土偶（国宝）



図9 土偶の撮影  
（左 山形県舟形町西ノ前遺跡出土）  
（右 秋田県北秋田市向様田A遺跡出土）

す活用できるのではないかと考える。

また、環状列石で知られる鷺ノ木遺跡での撮影においても、実際にはビニール紐が現場一面に張り巡らされていてとても画にならないような状況であったが、これもデジタルで起こして紐を全部消すことができた(図10)。その良し悪しの判断は別にして、こういうひとに見せる時にはより解りやすいような表現をする必要もあると考えられる。

#### 【土の中から出てきたよ】

自ら製作した写真絵本「土の中から出てきた

よ」には、これまで紹介してきたような遺物の写真を数多く掲載している。これらを通して、今の子供たちにとって「縄文」がはるか遠い昔のはなしではなく、世代にすればせいぜい500から1000人ほど前の代の自分のおじいさん、おばあさんの頃のことなんだと考えられるように、身近なものになってほしいと考えている。南茅部で出土した足形付土版は世代から世代に伝えるというシンボルとして捉えたい(図11)。

自分の写真を通して縄文の遺物のもつ魅力が少しでも多くの人に伝われば幸いである。



図10 遺跡の撮影  
(森町鷺の木遺跡)



図11 世代から世代へ(足形付土版・函館市垣ノ島A遺跡出土)

## 9 特別展示概要

### (1) 『交流の考古学 3 一船一』

#### <開催主旨>

北海道へは、各時代を通して本州、大陸などから船によって多くのヒトやモノが運び込まれて、それが北海道の歴史に大きな影響を与えてきた。今回は、船に関わる出土遺物を通して北海道の船と搬入されたモノについて探っていく。

#### <船の用字について>

船の用字は、大きく舟と船の2種類がある。舟と船についての定義は諸説があるが<sup>(1)</sup>、今回の展示では、舟と船を区別せず、船に統一して表記した。

#### <展示内容概説>

### 1 各時代の船関連遺物

#### 1-1 縄文時代の船

石狩市紅葉山49号遺跡から丸木船の船敷、櫂が出土している。北海道における縄文時代の船出土例は、まだこの1例しかない。

船形土製品は、中期の函館市サイベ沢遺跡<sup>(2)</sup>、後期の函館市戸井貝塚、石倉貝塚、千歳市キウス4遺跡、晩期の帯広市暁遺跡<sup>(3)</sup>から、船形石製品は、前期の木古内町釜谷遺跡<sup>(4)</sup>から出土している。戸井貝塚出土品の側面にはいつている縦の刻線を、構造船と捉える考えと、樹皮船と捉える考えが示されている<sup>(5)</sup>。

#### 1-2 続縄文時代の船<sup>(6)</sup>

続縄文時代の船出土例は、江別市江別太遺跡からあかくみの一部と櫂の一部が出土している<sup>(7)</sup>。

船形土製品は、苫小牧市タブコブ遺跡、遺物包含層の第Ⅱ黒色土層から出土し、縄文晩期から続縄文時代のものと考えられている。

余市町フゴッペ洞窟岩面刻画の中に、船をあらわしたとみられる画があり、その表現方法は、ロシアや韓国などの岩面刻画と共通してみられるものである<sup>(8)</sup>。

弥生時代の土器などに描かれた絵画資料にも、船を表現したものがみられる。そのなかで縦の刻線を連続させる描写は、上に紹介したフゴッペ洞窟や世界の岩面刻画とも共通するものである<sup>(9)</sup>。

#### 1-3 オホーツク文化期の船<sup>(10)</sup>

船形土製品は、利尻町亦稚貝塚、礼文町香深井1遺跡、稚内市オンコロマナイ貝塚、根室市弁天島遺跡<sup>(11)</sup>などから出土している。

その他、根室市弁天島遺跡から船の線刻がある骨製針入れが、羅臼町松法川北岸遺跡から船と櫂のミ

ニチュア木製品が出土している。

#### 1-4 擦文時代の船<sup>(12)</sup>

ここ20年間で調査された千歳市美々8遺跡<sup>(13)</sup>、千歳市ユカンボシC15遺跡<sup>(14)</sup>、札幌市K39遺跡<sup>(15)</sup>などの低湿部から出土した船関係遺物により、擦文時代の船についての様相が明らかになってきた。

千歳市美々8遺跡では、早櫂が3本まとまった状態で出土し(写真1)、千歳市ユカンボシC15遺跡では、車櫂などがみつまっている。



写真1 千歳市美々8遺跡早櫂出土状況  
(北海道立埋蔵文化財センター蔵 国重要文化財)

また、札幌市K39遺跡からは、丸木船の一部、櫂、舷側板などが出土している。

#### 1-5 アイヌ文化期の船<sup>(16)</sup>

アイヌ文化期の船についても、近年低湿地遺跡の調査によって、その様相が明らかになってきた。それは、『蝦夷島奇観』、『蝦夷生計図説』などに描かれたものとほぼ一致している。

苫小牧市沼ノ端で樽前b火山灰の下から5艘の船が発見されている。発見された船は、丸木船と板綴船で、炭素14年代測定法で調査した結果から室町時代のものとされている<sup>(17)</sup>。

あかくみは、船に入り込む水を掻き出すための道具で、『蝦夷生計図説』には、持ち手部分がくりぬ

かれたものが描かれている<sup>(18)</sup>。考古学的調査で同形態のものが出土したことにより、アイヌ文化期絵画資料の描写が正しいことが証明された好例である(写真2)。



写真2 千歳市美々8遺跡あかくみ出土状況  
(北海道立埋蔵文化財センター蔵 国重要文化財)

## 2 海を越えた交流によりもたらされた品々

### 2-1 本州から

#### 2-1-1 ヒスイ

北海道の縄文時代の遺跡で発見されるヒスイ製品は、自然科学的分析により新潟県糸魚川市付近産のヒスイが多く利用されていることがわかっている<sup>(19)</sup>。

千歳市美々4遺跡出土例は、糸魚川から約800km離れたもので、分析したヒスイ玉99点のうち、2点が日高産で、残りが新潟県糸魚川産であることがわかった<sup>(20)</sup>。

礼文町船泊遺跡出土例は、最北端のヒスイ玉で、糸魚川から1000kmも離れた場所まで、製品が流通していたことになる<sup>(21)</sup>。

縄文時代後期から晩期にかけての千歳市美々4遺跡、千歳市キウス4遺跡などで多数のヒスイ玉が出土している。お墓に伴う例が多くみられる<sup>(22)</sup>。

#### 2-1-2 赤彩土器

縄文時代に赤い着色をする場合、ベンガラと朱の2種類が多く利用された<sup>(23)</sup>。

北海道ではベンガラを利用しており、朱で着色されたものは、本州からもたらされたと考えられる。

千歳市キウス4遺跡、八雲町野田生1遺跡(写真3)から出土した赤彩土器は、土器の形態が本州のものであること、自然科学的分析の結果、塗られている赤色が朱であることがわかったことにより、本州からもたらされたものと考えられている。

#### 2-1-3 須恵器<sup>(24)</sup>

擦文文化の遺跡から出土する須恵器は、それまでの土器のような野焼ではなく、窯を使って焼かれた器である。今のところ、北海道から窯跡が発見されておらず、須恵器は本州から持ちこまれたものと考



写真3 八雲町野田生1遺跡出土赤彩土器  
(原資料 八雲町郷土資料館蔵 道指定文化財)

えられる。

千歳市キウス5遺跡から出土した甕は秋田付近からもたらされ<sup>(25)</sup>、千歳市ユカンボシC15遺跡から出土した双耳杯(写真4)は、福島県大戸窯で焼かれたものに類似している<sup>(26)</sup>。

10世紀頃、青森県五所川原に須恵器の窯がつくられると、そこからの製品が多くなり、千歳市オサツ2遺跡など全道各地から出土している<sup>(27)</sup>。



写真4 千歳市ユカンボシC15遺跡出土双耳杯  
(北海道立埋蔵文化財センター蔵)

## 2-2 大陸から

### 2-2-1 陶磁器

中世になると、本州へは中国の青磁・白磁・染付などが大量に輸入され、本州で焼かれた陶磁器とともに、北海道にもたらされた<sup>(28)</sup>。千歳市チプニー2遺跡から出土した青磁碗(写真5)<sup>(29)</sup>、千歳市ユカンボシC15遺跡から出土した青磁皿(写真6)<sup>(30)</sup>は、中国の龍泉窯の流れをくむものである。



写真5 千歳市チプニー2遺跡出土青磁碗  
(北海道立埋蔵文化財センター蔵)



写真6 千歳市ユカンボシC15遺跡出土青磁皿  
(北海道立埋蔵文化財センター蔵)

### 2-2-2 銭貨<sup>(31)</sup>

日本では皇朝十二銭を最後に、江戸時代の寛永通宝が作られるまで、自国で銭貨をつくることをせず、中国など他の国で作られた銭貨を使用していた。

函館市志海苔中世遺構出土銭は、約37万枚みつかり、日本最大の出土数である<sup>(32)</sup>。

千歳市美々8遺跡からも宋代、明代の銭貨が出土している。

## 3 船からみる先史時代の生業

### 3-1 鯨漁

函館市(旧南茅部町)大船遺跡堅穴住居跡<sup>(33)</sup>よりクジラの椎骨が出土していることなどから縄文時代以降連続とクジラを利用していたことがわかっている。

釧路市東釧路貝塚から、環状にならべられたイルカの頭骨が出土しており<sup>(34)</sup>、当時の人たちが意図的に配置し、イルカを食料としていたことがわかる。

函館市桔梗2遺跡からはシャチ形土製品が出土している<sup>(35)</sup>。

続縄文時代、礼文町浜中2遺跡からクジラ骨製アワビ起こし状製品が出土している<sup>(36)</sup>。この製品が、壱岐にみられる同様の製品と関係があるという考えも提示されている<sup>(37)</sup>。

オホーツク文化期には、根室市弁天島遺跡から船を利用してクジラ漁を行っている様子が描かれたと考えられる骨製針入れが出土している<sup>(38)</sup>。

### 3-2 海獣狩猟

重要文化財に指定されている千歳市美々4遺跡出土動物形土製品のモデルは、海獣説と鳥説の2説が有力である<sup>(39)</sup>。

縄文時代後期の礼文町船泊遺跡からは、海獣狩猟に利用されたと考えられる銚先が多数出土している<sup>(40)</sup>。

『蝦夷島奇観』には、船の舳先にたち、銚をかまえ、オットセイを狩猟する様子が描かれている。アイヌ文化期の千歳市美々8遺跡からは、同型式の回転式離頭銚に関するセットが出土している<sup>(41)</sup>。海獣の毛皮は、交易に使用されたと考えられている<sup>(42)</sup>。

### 3-3 アワビ漁

続縄文時代からアイヌ文化期にかけてアワビを主体とする貝塚がみつまっている。擦文時代の奥尻町青苗貝塚から出土するアワビの貝殻には穴があいていない<sup>(43)</sup>。

続縄文時代、礼文町浜中2遺跡<sup>(44)</sup>や中、近世の奥尻町米岡5遺跡<sup>(45)</sup>では、貝殻に穴があいており、ヤスをつかった漁を行っていたことがわかる。

中、近世の時期に北海道から、東北北部にみられるアワビを主体とする貝塚は、近世の俵物なども含めた本州、大陸とのアワビ取引に関連するものと考えられる<sup>(46)</sup>。

### おわりに

船は、ヒトとモノを北海道にもたらした。道内に入ったものは、相互に交易され、全道へと広がっていった。交易権を把握をした集団が勢力をもったと考えられる。

また、日常生活の中で、船は、漁撈、コンブとりなどに、また、河川や沿岸の交通具として、今の車代わりに使われていた。船の発達は、北海道史の変遷と密接に関わっていたといえる。

展示解説を執筆するにあたり、注に示した文献を参考にした。それぞれの研究史などは、注引用文献を参照していただきたい。この10年以内に刊行されたものがあれば、それらを中心に内容を検討し、記述した。

(勸北海道埋蔵文化財センター調査報告書については、北埋調報と略記する。

<注>

- (1) 日本の船については、石井謙治 1957『日本の船』東京創元社、石井謙治監修2002.12『日本の船を復元する：古代から近世まで』学習研究社、西村真次1938「先史時代及び原史時代の水上運搬具」『人類学・先史学講座』第3部第13巻 雄山閣があり、その中で船についての分類が提示されている。また、本誌宇野隆夫講演要旨にも分類基準が示されている。  
民俗学的調査では、出口晶子1995.6『日本と周辺アジアの伝統的船舶：その文化地理学的研究』文献出版、出口晶子2001.2『丸木舟』ものと人間の文化史 98 法政大学出版局がある。  
日本における出土船については、木原克司2002.4「船に関する出土遺物」千田稔編著『海の古代史：東アジア地中海考』角川選書 336 角川書店に出土例の集成がある。  
北海道の船については、由良勇 1995『北海道の丸木舟』マルヨシ印刷、由良勇2002.10『丸木舟』がある。
- (2) この資料について、戸井町教育委員会1994.3『戸井貝塚Ⅳ』のまとめに紹介がある。展示期間配布資料では触れていなかったため、追加する。
- (3) 帯広市教育委員会編1986.6『帯広・暁遺跡2』帯広市埋蔵文化財調査報告第5冊 帯広市教育委員会
- (4) 木古内町教育委員会1999.3『釜谷遺跡』。展示期間配布資料では、縄文後期と誤記していたため、訂正する。
- (5) 構造船説については、由良勇1995『北海道の丸木舟』マルヨシ印刷の中で、国立歴史民俗博物館西本豊弘氏の新聞掲載記事を紹介している。
- (6) 北海道における続縄文・擦文・オホーツク文化出土の遺物に関しては、大沼忠春 責任編集2004.11『考古資料大観 第11巻 続縄文・オホーツク・擦文文化』小学館が詳しい。今回の展示では、そのうち、中田裕香「土製品」、三浦正人「木・繊維製品」、種市幸生「骨角器」を参考に構成した。
- (7) 江別市教育委員会1979.3『江別太遺跡』江別市文化財調査報告書 9
- (8) 大塚和義2005.8「岩画の道 アジアが共有するイメージのネットワーク」『文化遺産の世界』18 国際航業株式会社
- (9) 深澤芳樹2005.10「港の出現と弥生船団」『月刊考古学ジャーナル』536 ニュー・サイエンス社
- (10) オホーツク文化の船については、大井晴男1976.12「オホーツク文化の船」北海道大学文学部附属北方文化研究施設編『北方文化研究』10 北海道大学がある。
- (11) 個人蔵。この資料については、種市幸生2004.11「骨角器」大沼忠春責任編集『考古資料大観 第11巻 続縄文・オホーツク・擦文文化』小学館に紹介がある。
- (12) 擦文時代からアイヌ文化期までの船資料については、特に美々8、ユカンボシC15、K39遺跡の低湿地遺跡調査で、船に関連する資料がまとまって出土したことにより、内容が明らかになってきたものがある。  
これらの資料について、センター刊行物では、センター15周年誌『遺跡が語る北海道の歴史』、センター25周年誌『遺跡が語る北海道の歴史』、『美々・美沢-新千歳空港の遺構と遺物-』の中にまとまった記述がある。  
その他、展示および展示図録に、北海道開拓記念館『先史文化と木の利用-遺跡からのメッセージ-』第50回特別展図録、財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構2001.6『よみがえる北の中・近世-掘り出されたアイヌ文化-』展示図録に紹介がある。美々8遺跡低湿地部については、田口尚2003.7「千歳市美々8遺跡」松井章編『環境考古学マニュアル』同成社、田口尚2005.3「低湿地遺跡が語るアイヌの生活」財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構『平成16年度普及啓発セミナー報告書』がある。  
船の構造、交易路については、鈴木信2003「擦文～アイヌ文化期の準構造船と渡海交易」『考古学に学ぶⅡ-同志社大学考古学シリーズⅦ』、鈴木信2004「北海道の古代交易と海上交通手段-続縄文～擦文文化期の交易路と準構造船」財団法人石川県埋蔵文化財センター『平成16年度環日本海交流史研究集会 古代日本海域の港と交流 発表要旨・資料集』がある。
- (13) 美々8遺跡低湿地部は、北埋調報第69集、第77集、第83集、第102集、第114集に報告されている。
- (14) ユカンボシC15遺跡の報告は、北埋調報第128集、北埋調報第133集、第146集、第159集、北埋調報第176集、第192集があり、第192集に三浦正人によるまとめがある。
- (15) 札幌市埋蔵文化財センター編2001.3『K39遺跡第6次調査』札幌市文化財調査報告書65 札幌市教育委員会。藤井誠二「札幌市出土の木製品」野村崇・宇田川洋編2004.7『擦文・アイヌ文化』新北海道の古代3 北海道新聞社。
- (16) アイヌ文化期の船関連出土遺物については、前掲(13)論文、図録などに詳しい説明がある。
- (17) 原資料：苫小牧市博物館蔵。
- (18) 村上貞助『蝦夷生計図説』。
- (19) 藁科哲男1994.3『玉類の原材料産地分析から考察する玉類の分布圏の研究』藁科哲男研究代表 平成5年度科学研究費補助金(一般研究C)研究成果報告書
- (20) 北海道埋蔵文化財センター編『調査年報』10
- (21) 礼文町教育委員会2000.3『礼文町船泊遺跡発掘調査報告書』
- (22) 美々4遺跡出土ヒスイ玉については、柳瀬由佳2005.3「北海道中部美沢川流域遺跡群出土の縄文ヒスイ玉集成」『玉文化』第2号日本玉文化研究会、柳瀬由佳2005.9「美沢川流域の遺跡群のヒスイ玉出土事例」『日本玉文化研究会第3回北海道大会研究発表会要旨集』がある。キウス4遺跡ヒスイ玉については、芝田直人2005.9「キウス4遺跡」『日本玉文化研究会第3

- 回北海道大会研究発表会要旨集』がある。美々4遺跡、キウス4遺跡墓出土ヒスイ玉については、藤原秀樹2006.3「北海道における縄文時代後期・晩期の墓制とヒスイ玉」『玉文化』第3号日本玉文化研究会がある。
- (23) 北海道における縄文土器の彩色技法については、小林幸雄2006.6『縄文土器の彩色技法に関する復元的研究』北海道開拓記念館 文部科学省科学研究費補助金研究成果報告書 基盤研究(C)がある。赤彩土器については、阿部明義「縄文時代後期後半の微隆線の土器について」北海道埋蔵文化財センター編2003.2『キウス4遺跡(10)』北埋調報第187集がある。
- (24) 北海道出土の須恵器について、近年出土例をまとめたものとして、鈴木琢也 2004「擦文文化期における須恵器の拡散」『北海道開拓記念館研究紀要』32がある。
- (25) 北海道埋蔵文化財センター1998.3『キウス5遺跡(5)』北埋調報第125集
- (26) 北海道埋蔵文化財センター編1998.3『ユカンボシC15遺跡(1)』北埋調報第128集。北海道・東北地方の双耳杯については、利部 修1998「東北以北の双耳杯と環状凸帯付長頸瓶」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』13がある。
- (27) 五所川原産須恵器の流入については、前掲注(24)鈴木2004論文がある。
- (28) 北海道出土の中世陶磁器について、近刊としては、鈴木信2001.3「北海道の中世陶磁器」北海道埋蔵文化財センター編『ユカンボシC15遺跡(4)』北埋調報第159集、越田賢一郎1997.3「中世食器の地域性1-北海道・東北北部-」『国立歴史民俗博物館研究報告』71がある。
- (29) 北海道埋蔵文化財センター2002.3『チブニー1遺跡・チブニー2遺跡』北海道埋蔵文化財センター北埋調報第173集
- (30) 北海道埋蔵文化財センター編2001.3『ユカンボシC15遺跡(4)』北埋調報第159集
- (31) 北海道出土の銭貨について、近刊としては、『出土銭貨』19 2003.8収録論文、鈴木信2001.3「北海道出土の中世銭貨」北海道埋蔵文化財センター編『ユカンボシC15遺跡4』北埋調報第159集、兵藤千秋2001.3「北海道の出土銭について」『苫小牧市埋蔵文化財調査センター所報』No.3がある。
- (32) 北海道志海苔中世遺構出土銭は、平成15年5月に国重要文化財に指定された。函館市教育委員会生涯学習部文化財課2006『中世の函館 志海苔出土銭と志苔館』。田原良信2003.8「志海苔中世遺構出土銭の再検討」『出土銭貨』19。
- (33) 南茅部町教育委員会1998.3『大船C遺跡 発掘調査報告書 平成8年度』
- (34) 釧路市教育委員会 1962『東釧路：東釧路貝塚発掘調査報告書』
- (35) 原資料：市立函館博物館蔵。北海道埋蔵文化財センター1988.3『桔梗2遺跡』北埋調報第46集
- (36) 国立歴史民俗博物館2000.3「浜中2遺跡発掘調査報告」『国立歴史民俗博物館研究報告』第85集
- (37) 山浦 清1999.03「漁撈具から見た弥生文化と恵山文化」『物質文化』66 物質文化研究会。国立歴史民俗博物館2000.3「浜中2遺跡発掘調査報告」『国立歴史民俗博物館研究報告』第85集。佐原真1999.10「北海道と沖繩」佐原真・田中琢編『古代史の論点』6小学館。種市幸生2004.11「骨角器」大沼忠春責任編集『考古資料大観第11巻 続縄文・オホーツク・擦文文化』小学館
- (38) 個人蔵。近刊では、種市幸生2004.11「骨角器」大沼忠春責任編集『考古資料大観第11巻 続縄文・オホーツク・擦文文化』小学館にクジラ漁に関連させた論述がある。
- (39) 美々4遺跡出土動物形土製品については、多くの研究がある。近刊のものでは、小杉康 2000.3「ビビの物語」大塚初重先生頌寿記念会編『大塚初重先生頌寿記念考古学論集』東京堂出版。小杉康2003.2『先史日本を復元する3縄文のマツリと暮らし』岩波書店。土肥孝 2006.5「さいたま市東北原遺跡出土の動物形土製品について」埼玉考古学会編『埼玉の考古学2』六一書房がある。
- (40) 礼文町教育委員会 2000.3『礼文町船泊遺跡発掘調査報告書 平成11年度』。縄文時代～アイヌ文化期までの銛先の変遷について、近刊には奥尻町教育委員会2003.3『青苗貝塚における骨角器と動物遺体』所収金子浩昌作成図がある。海獣に関する北海道の動物遺体出土例は、新見倫子1990「縄文時代の北海道における海獣狩猟」『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』第9号。海獣狩猟と銛先については、瀧川渉1998.3「北海道における縄文時代銛頭の型式学的変遷とその機能について」『北海道考古学』第34輯がある。礼文町船泊遺跡と浜中2遺跡における海獣狩猟の違いについての考察は、国立歴史民俗博物館2007『北の島の縄文人-海を越えた文化交流-』展示図録がある。
- (41) 北海道埋蔵文化財センター編 1997.3『美沢川流域の遺跡群 X X 美々8遺跡低湿度部』北埋調報第114集
- (42) 瀨川拓郎2006.9「異文化・商品・共生-交易と古代北海道狩猟採集社会の転換-」『考古学研究』53-2。鈴木信2003.3「続縄文～擦文文化期の渡海交易の品目について」『北海道考古学』39。鈴木琢也2005「擦文文化における物流交易の展開とその特性」『北海道開拓記念館研究紀要』33。奥尻町教育委員会2003.3『青苗貝塚における骨角器と動物遺体』。
- (43) 奥尻町教育委員会 2003.3『青苗貝塚における骨角器と動物遺体』。瀨川拓郎2006.9「異文化・商品・共生-交易と古代北海道狩猟採集社会の転換-」『考古学研究』53-2。
- (44) 国立歴史民俗博物館2000.3「浜中2遺跡発掘調査報告」『国立歴史民俗博物館研究報告』第85集
- (45) 北海道開拓記念館2003.6『北・貝・道 -海と陸と人びと-』第56貝特別展展示図録
- (46) 工藤竹久2003.6「北日本におけるアワビの貝塚」小野正敏・萩原三雄編『戦国時代の考古学』高志書院。瀨川拓郎2006.9「異文化・商品・共生-交易と古代北海道狩猟採集社会の転換-」『考古学研究』53-2。

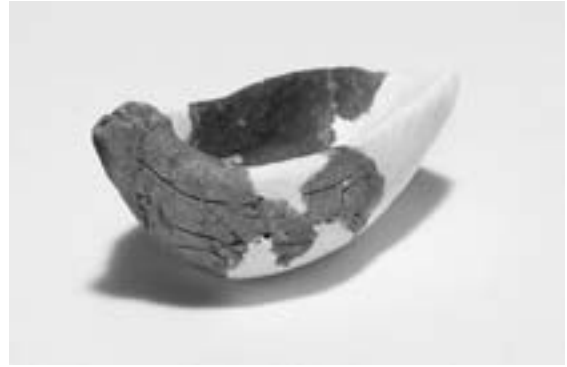
平成19年度特別展示 交流の考古学 3 船展 展示出品リスト

展示コーナー名	番号	資料名	遺跡・コレクション名	時期	点数	実物・複製品・写真	所蔵先	報告書・文献	備考
1 時代別にみた北海道出土の船関連遺物									
1-1 縄文の船									
	1	船関連資料	石狩市紅葉山49号遺跡	縄文中期	3	写真	石狩市教育委員会蔵	a	
	2	船形土製品	函館市(旧戸井町)戸井貝塚	縄文後期	1	実物	函館市教育委員会蔵	b	
	3	船形土製品	函館市石倉貝塚	縄文後期	1	実物	函館市教育委員会蔵	c	
	4	船形土製品	千歳市キウス4遺跡	縄文後期	1	実物	北海道立埋蔵文化財センター蔵	d	
1-2 続縄文の船									
	5	船形土製品	苫小牧市タブコブ遺跡	続縄文	1	実物	苫小牧市博物館蔵	e	
	6	岩面刻画	余市町フゴッペ洞窟	続縄文	1	写真	余市水産博物館蔵		
1-3 オホーツクの船									
	7	船形土製品	礼文町香深井1遺跡	オホーツク文化期	3	実物	北海道大学総合博物館蔵	f	
	8	船形土製品	利尻町赤稚貝塚	オホーツク文化期	1	実物	利尻町博物館蔵	g	
	9	船の線刻がある骨製針入れ	根室市弁天島遺跡	オホーツク文化期	1	写真	個人蔵		
	10	船と櫂のミニチュア木製品	羅臼町松法川北岸遺跡	オホーツク文化期	2	写真 複製品	北海道開拓記念館蔵	h	
1-4 檣文の船									
	11	船軸先	札幌市K39遺跡	檣文	1	写真	札幌市教育委員会蔵	i	
	12	早櫂	千歳市美々8遺跡	檣文	3	実物	北海道立埋蔵文化財センター蔵		重要文化財
1-5 アイヌ文化期の船									
	13	船敷	千歳市ユカンボシC15遺跡	アイヌ文化期	1	実物	北海道立埋蔵文化財センター蔵		
	14	メカジキの線刻がある櫂	千歳市美々8遺跡	アイヌ文化期	1	複製品	北海道立埋蔵文化財センター蔵		重要文化財
	15	あかくみ	千歳市美々8遺跡	アイヌ文化期	1	実物	北海道立埋蔵文化財センター蔵		重要文化財
	16	車櫂	千歳市美々8遺跡	アイヌ文化期	1	実物	北海道立埋蔵文化財センター蔵		重要文化財
	17	車櫂受台部	千歳市美々8遺跡	アイヌ文化期	1	実物	北海道立埋蔵文化財センター蔵		重要文化財
	18	丸木船・板綴船	苫小牧市沼ノ端出土	アイヌ文化期	1	写真	苫小牧市博物館蔵		
	19	板綴船模型(参考資料)			1	模型	開拓記念館		
	20	北方民族の船(参考資料)			4	写真	北海道立北方民族博物館蔵		
2 船によりもたらされたさまざまな遺物									
2-1 本州から									
2-1-1 ヒスイ									
	21	ヒスイ玉	千歳市キウス4遺跡	縄文	8	実物	北海道立埋蔵文化財センター蔵		
	22	ヒスイ玉	千歳市美々4遺跡	縄文	99	実物	北海道立埋蔵文化財センター蔵		
	23	ヒスイ玉	千歳市美々4遺跡	縄文	6	実物	北海道立埋蔵文化財センター蔵		
2-1-2 赤塗土器									
	24	赤彩土器	千歳市キウス4遺跡	縄文後期	2	実物	北海道立埋蔵文化財センター蔵		
	25	赤彩土器	八雲町野田生1遺跡	縄文後期	1	写真	原資料 八雲町郷土資料館蔵		
2-1-3 須恵器									
	26	須恵器	千歳市キウス5遺跡	檣文	1	実物	北海道立埋蔵文化財センター蔵		
	27	須恵器	千歳市オサツ2遺跡	檣文	2	実物	北海道立埋蔵文化財センター蔵		
	28	須恵器	千歳市ユカンボシC15遺跡	檣文	1	実物	北海道立埋蔵文化財センター蔵		
2-2 大陸から									
2-2-1 陶磁器									
	29	青磁碗	千歳市チブニー2遺跡	アイヌ文化期	1	実物	北海道立埋蔵文化財センター蔵		
	30	青磁皿	千歳市ユカンボシC15遺跡	アイヌ文化期	1	実物	北海道立埋蔵文化財センター蔵		
2-2-2 銭貨									
	31	開元通宝	千歳市美々8遺跡	アイヌ文化期	1	実物	北海道立埋蔵文化財センター蔵		
	32	熙寧元宝	千歳市美々8遺跡	アイヌ文化期	1	実物	北海道立埋蔵文化財センター蔵		
	33	皇宋通宝	千歳市美々8遺跡	アイヌ文化期	2	実物	北海道立埋蔵文化財センター蔵		
	34	元豊通宝	千歳市美々8遺跡	アイヌ文化期	1	実物	北海道立埋蔵文化財センター蔵		重要文化財
	35	元祐通宝	千歳市美々8遺跡	アイヌ文化期	1	実物	北海道立埋蔵文化財センター蔵		
	36	洪武通宝	千歳市美々8遺跡	アイヌ文化期	1	実物	北海道立埋蔵文化財センター蔵		
	37	寛永通宝	千歳市美々8遺跡	アイヌ文化期	1	実物	北海道立埋蔵文化財センター蔵		重要文化財
	38	熙寧元宝	千歳市ユカンボシC15遺跡	アイヌ文化期	1	実物	北海道立埋蔵文化財センター蔵		
3 船からみる北海道の歴史									
3-1 生業から									
3-1-1 鯨漁									
	39	鯨漁が描かれた骨製針入れ	根室市弁天島遺跡	オホーツク文化期	1	写真	個人蔵		
3-1-2 海獣狩猟									
	40	動物形土製品	千歳市美々4遺跡	縄文	1	複製品	北海道立埋蔵文化財センター蔵		
	41	回転式離頭結中柄	千歳市美々8遺跡	アイヌ文化期	3	実物	北海道立埋蔵文化財センター蔵		重要文化財
	42	回転式離頭結指掛部	千歳市美々8遺跡	アイヌ文化期	1	実物	北海道立埋蔵文化財センター蔵		重要文化財
	43	回転式離頭結棒・柄	千歳市美々8遺跡	アイヌ文化期	1	実物	北海道立埋蔵文化財センター蔵		重要文化財
3-1-3 アワビ漁									
					168				

文献・報告書	発行先・編著者	出版年	報告書・文献名	出版者	シリーズ名
a	石狩市教育委員会	2005.3	石狩紅葉山49号遺跡発掘調査報告書		
b	戸井町教育委員会	1994.3	「戸井貝塚Ⅳ」		
c	函館市教育委員会	1999.3	「石倉貝塚」		
d	佐藤一夫・宮方靖夫編著	1984.3	「タブコブ」	苫小牧市教育委員会	
e	大場利夫・大井晴男編	1976.3	「香深井遺跡 上」	東京大学出版会	
f	大場利夫・大井晴男編	1981.2	「香深井遺跡 下」	東京大学出版会	
g	利尻町教育委員会	1978.8	「赤稚貝塚」		
h	羅臼町教育委員会	1984.1	「松法川北岸遺跡」		羅臼町文化財報告8
i	札幌市埋蔵文化財センター編	2001.3	「K39遺跡第6次調査」	札幌市教育委員会	札幌市文化財調査報告書65



函館市戸井貝塚出土船形土製品  
(函館市教育委員会蔵)



函館市石倉貝塚出土船形土製品  
(函館市教育委員会蔵)



千歳市キウス4遺跡出土船形土製品  
(北海道立埋蔵文化財センター蔵)



苫小牧市タブコブ遺跡出土船形土製品  
(苫小牧市博物館蔵)



利尻町亦稚出土船形土製品  
(利尻町立博物館蔵)



礼文町香深井1遺跡出土船形土製品  
(北海道大学総合博物館蔵)



礼文町香深井1遺跡出土船形土製品  
(北海道大学総合博物館蔵)



礼文町香深井1遺跡出土船形土製品  
(北海道大学総合博物館蔵)

---

## 北海道立埋蔵文化財センター年報 9

平成19（2007）年度

---

平成20年 5月21日発行

編集：財団法人 北海道埋蔵文化財センター

発行：北海道立埋蔵文化財センター

〒069-0832 北海道江別市西野幌685-1

Tel：(011)386-3231 Fax：(011)386-3238

E-mail：mail@domaibun.or.jp

URL <http://www.domaibun.or.jp/>

印刷：社会福祉法人 北海道リハビリ

〒061-1195 北広島市西の里507番地1

Tel：(011)375-2116(代) Fax：(011)375-2115

---